

会友寄稿

～皮膚科教室の思い出～



在局5年間の思い出

弘中 哲也
(昭和19年卒)

私は昭和19年9月より24年9月までの5年間に在局しました。終戦直前より直後で世の中は大混乱でした。医学部でも民主化、刷新運動が起こり「基礎臨床委員会」が発足しました。

このたび出される九大皮膚科開講100周年記念誌に、在局の思い出として、自遠会同門会誌1号に寄稿した「終戦前の教室」を再掲して残したいと思います。

「私は昭和19年9月に大学院特別研究生として皮膚科に入局しました。医局員は次々に出征され、皮膚科は皆見教授、荒川助教授、古賀講師、泌尿器科は富川教授、吉田助教授、山崎助手に18年に入局の田中弘士先生と私の8名となりました。助教授以下は皮泌科の別なく診療に当たるといった状態でした。戦局も不利になり、空襲警報の中での診療でした。終戦近くなり、木造教室の疎開が始まり重要な物を朝倉郡の小学校に疎開したことや、病院で南京虫に悩まされたことなど今では想像もできないことばかりの一年でした。」

前記のように私は皮膚科の大学院特別研究生(特研生)として皮膚科、泌尿器科両教室に入局しました。皆見教授のご指導を受け、研究テーマは戦時中であつたので、火薬製造の際に発生する(薬物性皮膚炎の研究)でした。高性能火薬製造に使用される「ジニトロ・クロール・ベンゾール」による皮膚炎の研究でした。八幡市黒崎穴生の火薬工場に向いて、いろいろ調査しました。教室では薬品を用いて動物実験をしました。

昭和20年8月15日に終戦となり、9月下旬に皆見教授のお伴をして、原爆被爆地長崎を訪れました。目にした光景は今も忘れられません。九大でも広島での被爆者の診療をしました。

私の研究は終戦後も続け、一応終了したので大阪の総会で発表し、論文にまとめました。この頃よりいろいろの事情から皆見教授の教授辞任の動

きがあり、教授候補者選考内規により公募の4名の候補者の中から樋口先生が教授に選ばれ、昭和23年10月に就任されました。私は引き続き樋口教授のご指導の下で、同じような構造の人工甘味料ズルチンの製造従事者に生ずる瘡瘡様皮膚疾患について、福岡県吉富町の吉富製薬にゆき、調査研究を一応終了しました。昭和24年9月をもって特研生の第1期、第2期5年間に終了しました。直ちに山口赤十字病院に赴任しました。

樋口教授には1年間ご指導を受けましたが、昭和24年春総会への途中先生のお伴をして長島愛生園を訪れた時のことです。先生に大変お世話になったことを申し訳なく今も思い出します。

在局中経験したペニシリン、ストレプトマイシンの効果には目をみはりました。

終戦後は医局も復員、新入局者により次第に活気が戻ってきました。教室内では宴会毎に教室保管のアルコールの消費量が増えたことも楽しい思い出です。



昭和23年入局の頃

渡部智俱人
(昭和20年卒)

まずは開講100周年、誠にめでたく、御同慶の至りである。

私は昭和23年春、ソ連抑留から帰国しての入局で、正門を入った直ぐ左側に皮膚科泌尿器科の木造2階の教室があった。西隣が耳鼻科、北隣が精神科の建物で亭々たる樹木に囲まれた静謐な雰囲気は好感が持てた。恰も皆見教授、退官直前で一度だけ教授室に挨拶に伺った。こちこちに緊張し、軍隊で上官に対する以上の恐怖を覚えた。当時の「皮膚泌尿器科診療の実際」、「皮膚梅毒学」などの偉大なる著者であったから、お言葉は「ああそうか」で終わった。後任は暫く荒川助教授が代行され、樋口教授が間もなく就任された。

泌尿器科とも未だ明確な分離がなく、同じ建物

内に在り、ウロは富川教授、望月助教授で、両科は助手以下の勤務のローテーションが渾然とし、北側の研究室内も仲良く同舟していた。ウロは外来で、慢性淋疾の尿道洗浄や尿道狭窄症にブーゼールなど絶えず行った。やっと抗生物質のペニシリン注射剤が治療薬として出まわった頃で、抗菌剤としてはドイツのドマークによるプロントジュールに始まるアジプロン、トリアノン、テラジアジンなどのサルファ剤が健在で可なり功を奏していた。

因みに当時の社会背景を略記すると、未だ米、衣類、甘味料などは配給制で、各科の医局員は陸軍の軍服や国防服姿が珍しくなく、戦時の名残りとどめていた。下宿代が2食付で6500円余が相場場で、私は助手の下のランク、有給医員の月給5000円足らずだった。黒門に間借りし、自炊した。昭和23年の福岡市の人口は34万人、学生公務員など以外の市内転入は制限されていた。博多駅は木造2階建てが馬場新町にあり、駅のコンコースを北へ出ると、博多湾が丸見えで街は焼夷弾による焼け跡が至る処に広がっていた。唯一、チンチン電車が住民の足で、いつも満員であった。昭和23年3月、忌わしい生体解剖事件の軍事裁判が開かれた。10月29日第3回国体が平和台競技場で開催。昭和24年5月21日午後、昭和天皇が九大病院正門から入られ学内を見学された。出迎えの人は少なく、間近に接することができた。これは一ヶ月に亘る九州巡幸の始まりであった。

11月、中間子理論で湯川秀樹がノーベル賞を受賞した。

九大医学部内では刷新委員会、基礎臨床委員会(KRI)なる会を作り、講師以下、医学部、病院の発展のための民主的討議を毎月1～2回の割合で開催していた。私も数回出席順番に当たり、末席に加わったが、余り関心がなかった。

教室玄関を入り、左右に階段があり、2階の東側に会議室兼食堂があった。午前中の外来が終わる12時半前後に各自、弁当持参で集まり、正面に教授が座し、左右に上位の者から列した。昼食を共にしながらの話題が豊富であった。私は自炊生活で、ことに昭和24年、この1年間、1日1食で

研究室の隅に寝泊りすることが多く、仕事を続けた。ソ連抑留生活のことを思えば物の数ではなかった。従って医局での昼食会の40分余はお茶のみを頂いて黙っていた。

蜂須賀医局長から弘中医局長へ替った頃で、ぼつぼつ就職者が出始め、筑豊地区の炭坑病院希望が多かった。市内の病院の3倍の給与は魅力的であった。この当時、私には若武者の如き樋口教授の御活躍に只管、敬意を表するのみであった。



忘れ得ぬ先哲医人と 医師活動

林 経三
(昭和20年卒)

馬齢80の頂に達した。老病の身ではあるが日々枯れゆく老化現象に毎日放映される健康高齢者を真似て抵抗を試みる毎日である。開業医として50年余を経て療養閑居している今日、既に故人となられた恩師富川、樋口、貫教授は兎も角も我が人生に多くの感銘と指針を与え処世を見習ってきた忘れ得ぬ先哲医人、特に教室の諸先生の面影と思いが、走馬灯の様にマキャベリズムと米化した現世から離れて胸中を去来する今日此頃である。

昭和22年頃「サムス旋風」と言われる日本医師会組織に対する占領軍の干渉が始まり、闇、不正の横行の世に変化し、この状勢に反発、無医地区診療に入ることとし、叔父のついで宮崎、日向市の奥10里に診療所を開設。当時、地方の無医地区は衛生兵や無免許の医師が診療、保健所も黙認状態で、全能の神の如く全科5年間の間のランドアルツト生活後、専門研修の為、鹿大に診療所を御願ひし帰省、入局し九大で研修論文作成と自宅診療の日々を過ごした。診療は保険患者は僅かで、農漁村では慣行料金での一般診療それも益、正月払いで集金が一仕事であった。

昭和39年4月、職業性疾病の集団発生整理の為、三菱化成に出張し、新しい工業製品中の発癌性物

質の検索が問題となり、坂本講師や衛生学の猿田教授の手を借りて整理した。市医師会から北九州市理事成り立ての私に、九医連から日医環境保健委員会、引き続き産業保健委員会に出席を命ぜられた。

さて、職業病加療中の患者連中が北九州での開業を励め、現在地に土地も見つけて頂いたので博多に帰る迄と医院を開設する事にしたが、翌40年頃に区医師会理事の軍医学校先輩藤下専務より看護学院講師に指名されたのが縁となり学院主事、区副会長、市理事、県理事、区会長を歴任し九区ブロックから推されて日医環境保険、産業保健委員として約30年間、上部から下部まで医師会活動に関与することになったが、幸い武見、花岡、羽田、村瀬各会長の足下で委員として出席し、答申作成に当たった日々は忘れる事ができない。

虎ノ門病院の先30米位にマドリッド一番街にでも迷い込んだような粋をこらした旧日医会館が屹立、美しいステンドグラス窓から射し込む光に北里博士の像を拝しつつ重厚な絨毯の敷き詰められた黒光する手すりに従い階段を昇ると、左手に会議室があり薬師三尊像を正面に各ブロック代表、大学代表、後列に厚生省、労働省からのオブザーバー、事務関係者が出席、担当瀬尾聶理事が開会、武見会長は短軀眼光炯々として定時に着席、審議前に予定外の委員他政府委員や大学側のメンバーが参加していると直ちに担当に正し、時に予定外があると閉会を命ぜられる時もあり、流石に日医の厳粛な委員会だと緊張した。

さて、総てに峻厳な武見先生も退任され、産業医大10周年記念講演に来幡の折、「社会保険の改善が続く現況に将来は如何なりましょうか」と御尋ねすると「私は今は只の会員で役員に聞いて欲しい」と答えられ、先生の公私の分別には驚いた。

次の花岡堅而会長は昭和58年と記憶しているが委員会当初、田夫子然として「保険あつての医療ですし、草深い田舎でも生活できるので、役所の言にはよく従う様に」と訓され一同無然となった覚えがある。

次の羽田春兔会長は明朗な紳士で、にこやかに笑って登場、小生には「僕も九州男児だよ」と親

しく話しかけられ、軍医学校後輩と判ると公私共に可愛がって頂いた。昭和63年7月頃日本医師会館建設の件が話題に上がった折も「日本医師会の新世紀の顔なので立派な建築をするよ」と意気込んでおられたので「大和の様な大きなものになると会長も一緒にチン（沈）しますぜ」と言うと「見てろよ無手勝流で驚く様なものを見せるよ」と言われたが、平成2年3月文京区駒込に壮大な会館が会員負担もなく聳立していた時には驚いた。羽田会長は上機嫌で各階を紹介され、会長室に招き入れ「日本医師会長の椅子に座ってみろよ」と有難い体験を与えられた。

平成6年には答申の整理も終わり、クラシックと映画の好きな村瀬敏郎会長に交代、委員を辞し県理事一体となった。県医師会では、昭和41年から全理事の敬慕を集め明朗闊達な石田正太郎会長が私の担当にも意欲を示され、特に小零細企業の健康管理が経費が無く難渋していたので率先亀井光知事に助成請願に私と共に同道され、承認されると県民の健康の為に前進したと喜んでおられた先生の情熱は有難かった。今もって「石田先生を偲ぶ会」が旧理事によって続けられている事が先生の徳を彰するものであろう。

さて地元北九州市医師会は、私が八幡医師会理事に就任した昭和41年頃から五市合併問題が起こり、行政の市一本化合併と共に昭和41年4月八幡医師会から小野一雄会長が推挙され山熊専務と共に市の執行部を組織され発足した。昭和41年12月に小野会長御逝去、八幡医師会では三嶋瓣三会長から横溝正二会長の新執行部が発足、私が副として補佐することになった。

横溝会長は当時社保改悪闘争を始めとして看護婦不足問題、休日急患諸問題山積の中を、私共各理事の意見を取り入れられ先ず広報対策（区医ニュース創刊）、会員融和、健康の為の運動会（医師会、開業、勤務、看護学院生共に）、進化する変遷を残す為の医師会史編纂委員会等の私の提案を実施、急患の為のサブセンター設置問題等で奮闘中であつたが、保険医総辞退並びに除名者告訴対応の為の裁判があり、更に済生会八幡総合病院火災もあつて防災訓練（消防局と連携）にも取

り組んだ。看護婦養成の会員の要望が強くなったが、学院入学生減少で経営不安の為全九州の中学に看護学校の説明会と募集に理事を派遣した。そして理事会で議論し、高看養成のない看護学校は将来性がない、北九州市の様な細長い市では各区にサブを持つ救急施設を医師会が保有して官が之を経営し、医師会が医師当直等各科連携の3次体制を運営、各区医師会は緊急災害時の初期コントロール機能を持つ等々の原則が必要とされるが、旧医師会館ではその機能が果たせないで早急に建設設置が必要との結論に達した。そこで総会に案件を諮ったが、当時は派閥もあり、会長は心配性の野人であったが全員の信に対応出来ず「設立は認めるが会よりの出費と会員負担なしで」との結果となった。紆余曲折の末、既に物色した紅梅町の土地に、申請許可された助成金で新設看護学院とサブセンターが完成間近となり、八幡医師会執行部役員一同が安堵の胸を撫でていたが、気がつけば既に役員改選期に当り、執行部一同選挙準備の暇もなく、会長の大事業を執行部で推進している間に足をすくわれ、新設看護学院竣工（サブセンターを含む）3ヶ月前に執行部交代となった。横溝会長の決断により行われた区医ニュースの発行、医師会史編成委員会、高看養成を含む学院運営は引き継がれ、この執行部の献身的な努力と手腕により得られた土地建物が原資となり、その後の転売と会員負担納入で、現在の八幡東区の中心部にそそり立つ八幡医師会館及び八幡医師会看護専門学院に発展し現在に到ったことは喜ばしいことである。最初の困難な県段階の大事業を成し遂げ竣工前に得意のヒバリの「柔」の一節を口ずさんで去られた横溝会長と執行部役員の無手勝流の功績も忘れられてはならないものと思う。

私は今人生の川下りの船頭として流れを終えんとしているが、流れに棹さして上流から下流までの川辺の空と水の景観と共にそそり立つ連山の峰に輝く銀嶺の様な忘れ得ない先哲医人医界トップの賢人の姿を心に浮かべ、事もなく終点に向かいつつあることを感謝し、平安な流れに身をまかせ我が町と國のよき医療と福祉の平和な明日の続くことを祈っている。

「枯葉落日而亦善哉」



樋口謙太郎教授の 思い出

中山 靖佐
(昭和20年卒)

昭和22年のクリスマスに、大村国立病院職員家族の演芸会が、病院講堂で行われた。奥野勇喜皮膚科泌尿器科部長の前任者である久留米医大皮膚科教授・樋口謙太郎先生も招待されて来られた。樋口教授は奥野部長に、「僕は来年九大に帰ります。君を助教授に推薦した。又、小倉国立病院に土井羊吉君を久留米からやるが、大人しやかですので、彼の小倉中学校の後輩である中山をつけてやってくれ」と言われた。当時、大村国立病院は、外地の大学の教授方の帰還第一歩を標す所となっていて、中山のような卒業したばかりの者は採用されなかったのに、奥野教授のお陰で採用されていたので、転勤は出来ないかも知れなかったが、辞表を出して行きなさい、後は奥野が責任を持つと言われた。4月になり、九大皮膚科教授になられた樋口先生に御挨拶に行くと、今、肺梅毒を調べている所だ、国立の肺結核患者の梅毒血清反応陽性者を調べろと言われた。早速、病棟で肺結核患者の梅毒血清反応陽性者を調べて報告した。しばらくして、教授の肺梅毒の論文が出来上がった。末尾に中山にも世話になったと書いてあり、教授の第二番目の弟子にしてもらったと自惚れた。私の学会での初発表は、久留米医大の講堂で、第一席なのに、すでに樋口教授は最前列の席に座っておられ、発表を聞いて下さった。落ち着いて喋れた。

学位論文のテーマをいただき、土井医長の御援助により、研究も進み、第一報を書き上げ教授に提出した。真っ赤に修正された論文が返ってきた。早速、修正し奥野助教授にも見てもらいたくて、奥野助教授のもとへ、それから教授の所へと送っ

ていただけると考えて提出した。しばらくして、教授から、第一報は返したはずだが、どうなっているのかとお尋ねがあり、以上のように致しておりますと答えた。その後、論文の修正は返って来なかった。

土井医長の御援助により研究も進み、血清皺模様の発像次第も解り、それを活動写真にしてはと云われたが、国立病院の月給では続けられませんと申し上げた。学位論文審査の書類の作り方を、大学の事務局に習って来なさいと言われ、早速習得し完成。教授に提出すると、履歴書を見ながら、一年早いよ、土井医長より先に学位を取る事は出来ないと言われ、「ハイ。待ちます」と答えた。

偶々下関国立病院と小倉国立病院の野球の試合があり、左翼手として出場、下関国立病院の看板に、皮膚科泌尿器科近日開院と書かれてあるのを見て、懇親会で病院長に、誰か決まっているのですかと尋ねたら、まだ大学にもお願いしていないとの事。小倉国立病院では、一年も前から久留米出身の古河昭司君が、臨時として働いてくれており、私が下関に移れば、採用してもらえないでしょうかと、後日、樋口教授にお願いしたところ、いいだろうとの事。昭和27年3月に下関国立病院に勤務させていただいた。転勤してから考えると、小倉国立病院では病棟を改築して官舎として使用していたので、家賃光熱費は「ただ」。下関国立病院では宿舍が与えられるので、家賃光熱費がいる。大変なことになると悩んでいたら、丁度その時、門司鉄道病院皮泌科医長、星子未知男先生が病院に来られ、門医員（鉄道病院皮泌科）が休職するので、君と同年輩の人が欲しい、心当たりはないかとの事、俸給は鉄道の方が高いし、全国鉄二等パス、宿舍料も安い。下関国立病院は未だ一年にもならないのに、身勝手なお願いですが、鉄道病院に移らせていただけませんか樋口教授に申し出た。お許しを得て、昭和28年2月に鉄道病院に転勤したら、6月28日に水害に遭い、学位記授与式には出席出来なかった。

秋に鉄道関係の学会があり、仙台鉄道病院皮泌科医長藤村實雄先生は、富川染次泌尿器科教授と九大同期だそうで、「僕が定年退職時には、仙台

に来んとならんぞ。九大の籍だから」と言われた。昭和36年3月、藤村医長が定年退職され、今橋仙台鉄道病院長の欧州視察のため7月によりやく皮泌科医長の発令があり、仙台鉄道病院に着任後、直ちに東北大学皮膚科教室泌尿器科教室を訪問し、教室の行事に参加させていただくようお願いした。殊に、泌尿器科教室の抄読会后、教室の先輩方と宍戸教授宅で麻雀をして色々とお教えを乞うた。しばらくして皮膚科の地方会があり、偶々樋口教授が来て下さって、関係大学の教授方に紹介して下さいました。夜は町をご案内しようと思っていたら、内地留学で仙台の事は御存知で反対に案内していただいた。

月日が流れ、娘が東京の大学受験となり、東京在住の保証人が必要となり、医務課長にお願いしようとして本庁に出向くと、門司の星子医長が辞めるがどうするかとの事。仙台鉄道病院皮膚科医長には小松昭文先生がおりますので、泌尿器科医長を宍戸教授にいただければ、門司に帰って良いですねと申し上げた。翌日、今橋病院長に御同行をお願いして、宍戸教授宅を訪れ、後任医長を確約して門司に帰る準備完了。

昭和41年4月に門司鉄道病院に転勤してからは、仙台で覚えたゴルフで樋口教授のお供をして九州北部下関の有名ゴルフ場を廻らしていただいた。古賀のゴルフ場で、飛ばなくなるとゴルフも面白くなるよと言われた言葉が耳に残っている。

教授の御冥福を祈ると共に、教室の益々の御発展を祈ります。

学位論文とカメラ

高木 憲三

(昭和20年卒)

昭和28年、私は樋口教授より「陰囊皮膚の特異性」というテーマを貰った。当時、私は飯塚の炭鉱病院の外科に勤務していたが、九大第一外科の先輩でもある院長の計らいで皮膚科でティーテル

アルバイトをすることになった。全くの畑違いで、教室員中誰一人知った人はなく、天涯孤独の感じで全く面食らったものだった。また、テーマそのものも皮膚科学会の永年に亘る一大テーマである。部外者の私にどうしてこんな大テーマを与えられたのかと樋口教授の真意を疑った程だった、後日、このテーマは、何人かの先生方が教授にお返ししたものだことが判った。

そんなこととは露知らず、教授からの指示通り皮膚組織の解剖学的、生化学的相違の有無から始めたが、研究の性格上、そしてまた勤務の関係上、頻回に福岡に出て行くことも出来ないで、顕微鏡写真を自分で撮影しようと考え、接写装置の付けられるカメラ（ニッコールレンズ50ミリ f 3.5の付いたライカ型カメラ・ニッカカメラ）を購入した。

しかし、私は曾て一度もカメラを手にしたことがなく、カメラの知識は全くゼロだった。幸いにも内科にカメラに詳しい先生がいらしたので、カメラの購入から取り扱い方、撮影、現像、引き伸ばし迄全てを教えて戴いた。「習うより慣れろ」で、私は毎日のように1才の長男、病院では看護婦さんや患者さんを撮影してはすぐ現像して確認した。

やがて、一般の撮影や現像が出来るようになったので、いよいよ本番の顕微鏡写真の撮影に移った。夕食後毎晩、病院の試験室に行き、顕微鏡の入射光、対物レンズ、対眼レンズの光量を測定してノートに記録しては撮影したものだった。初めのうちは全く影も形も出ず、失敗の連続だったが、やがてフィルムに適度な濃度の陰画とシャープなピントの映像が見られるようになる迄になんとカメラを購入して1年以上の歳月が流れていた。それでも、樋口教授からは研究の進行状態等を聞かれたことはなかった。恐らく全く期待されていなかったと思う。

撮影はいよいよカラー撮影に移った。当時、ポジフィルムは専らコダックのフィルムだったが、コダクロームはハワイまで現像に出していたので2週間かかった。ある日、送ってきたフィルムを見て我が目を疑った。見事な色合いの皮膚組織・

角質層の中にPAS染色に赤く染まった白癬菌が鮮明に写し出されていたのだ。早速、九大皮膚科教授室に走ったのは勿論である。

かくして、昭和32年ストックホルムの国際皮膚科学会ではそのスライドが樋口教授の講演時に映写されたと聞き及んでいる。

あれから約50年の歳月が流れ、私も新しい時代のカメラ術を楽しんでいる。

思い出すまに

田代 勝彦
(昭和22年卒)

再度の原稿依頼がありましたので、老朽化した記憶装置を繕いながら五十数年前のことどもを思い出してみたいと思います。

昭和24年4月入局後、富川、樋口両教授にご挨拶に伺い、そのあと望月助教授室に入ったところ、いきなり一升ビンの栓をあけてコップになみなみと入れるや、キュッとやり給えとなりました。昼飯前のスキッ腹であったが言われるままに一気に飲み干したところ間髪を入れず、「あんた中々飲みっぷりがよか」と、もう一杯つぎ足され、2杯飲むのが新入局者の慣習だとうまく欺され、正直に馬鹿とお人好しのついた私は仕方なしにこれも飲まされてしまいました。これは屯でもないところに入って来たと思いましたが、そのうち足がふらつき目が廻るようで、その日は奥野助教授への挨拶を取りやめて下宿に帰ってしまいました。

後日、百瀬先生の指示で本館中央東側のL研究室があてがわれ、皮泌科の外来診療の手伝いみたいなことをやっておりました。L件の隣りが浴場で、或る日、風呂が奥野先生と一緒に、風呂から上がったところ私のパンツが失くなり古びた褌が一つ残っております。犯人は奥野先生以外に考えられません。そこでノーパンツにズボンをはいて奥野先生のところに行き事情を話したところ、御自分のズボンのバンドを緩め、あつまんこと

をしたパンツをあげるから仕事が終わったら僕のところに来なさいとなり、今思うと渡辺通り一丁目の南、高砂あたりだと思いますが、先生に同道して下宿に伺ったところ室内には洗濯物入れの大型トランクがデンと置かれ、部屋の四方に紐をかけ、それにシャツやら褌がぶら下がり、まるで下着の満艦飾そのものでした。室に入ると冷酒とスルメが出て、先生は余り飲まれないので私許り飲まされ、いつの間にか酩酊してパンツのこと等忘れて帰ってしまいました。勿論私のパンツの行方は不明です。

教室では皆さんよく勉強していましたが、夕方になると酒談義に花が咲き、中でも河崎、北村の両先生は酒豪の域に達していました。占部先生とも時折、御一緒しましたが私は未だに先生の酔われた姿を見たことがありません。

京都での総会の帰途、某メーカーの招待で大阪曾根崎新地の料亭「関ふく」に富川、樋口の両教授、百瀬、北村、江本の諸先生と招かれて午前一時頃まで痛飲し（樋口先生だけは早目に寝られた）翌日は当時大阪で一二を争う料亭「つるの家」で馳走になり席上富川先生の柱踊り（柱に縛り付けられて踊る）を見た時は吃驚しました。最終日は富川先生にお伴して華陽堂病院（当時関西一の泌尿器科）に井尻辰之助院長（九大4期生で開業医で宿題報告を担当された方）をお訪ねし、雲を衝く粋な偉丈夫で往年、九大切つての酒豪だったと言われる先生にお会い出来た上、優しいお言葉までかけて頂き光栄でした。又、東京の総会のあと、上野の宿にたむろしていたところ、百瀬先生が叔父さん（百瀬結日本ビクター社長）のところに立寄って、当時珍しかったジョニー黒を2本貰って来られ、「あんた少し飲みない」と言われたので一晩で一本あけたところ、翌朝、百瀬先生が来られ、「アンタあれは親父への土産バイ、少し飲めというるとに全部飲んでしまうて馬鹿じゃないとな」と叱られたものです。（蛇足ですが百瀬先生の厳父、正直博士（九大一外科）が私共の仲人です）

また、教室の忘年会の二次会を済ませ終電車で中洲から箱崎の下宿に帰った積もりで翌日出勤し

ましたが、医局の中食会の折、樋口先生が昨夜、電車の中で大勢の酔客を前にして大声で演説している男が居て、よくみると田代君だったよ。何か難しいことを言ってたよと話され冷汗をかいたものです。

その他お酒にまつわる武勇伝は数多くありますが、諸般の事情で割愛させていただきます。

何れにせよ九大皮膚科在局中に酒の腕が上達したのは確かです。改めて当時の諸先生に厚く御禮申し上げます。



中溝 慶生
(昭和22年卒)

昭和20年5月19日、福岡大空襲で下宿が焼かれ、本やノート、聴診器などすべて失くなった。60年前の大学3年生の時である。その後終戦となり、インターン制度が始まった。下宿もないし、国立大村病院（現国立長崎病院）でインターンすることにし、少し早目に夏休みから実習へ行った。その時、初めて医局長で皮膚泌尿器科部長の樋口謙太郎先生にお会いした。夏休みの間、膀胱鏡やブジー、尿道洗滌を毎日やらされた。

インターン時代はダンス部長であった樋口先生から社交ダンスを習った。半年遅れて医専卒業の安元健児君らが加わって、賑やかになった。その後、無給で教室に入局するような経済的余裕もなかったのも、死んだ親父が外科医として勤務していた長崎三菱造船所病院の皮泌科に就職した。

そろそろ九大に入局して正式に研究でもしようかと思ひ、昭和27年10月から無給副手（研究生）となった。入局したら樋口教授から癩菌の培養というテーマをもらったが、もしそれが成功したらノーベル賞もののようなことがとても出来そうにないと思ひ、教室では卓球をしたり、夜は麻雀や酒を飲んで遊んでいた。ところが偶然にも安元君が、広島大学の細菌学教室で学位をとり、臨床の

勉強に入局してきた。臨床が初めてなので、泌尿器科の患者の検査を手助けしてくれと言われ、細菌の培養は彼が主にやるということになった。普通の培地ではとてもだめだろうから、博多名物の「めんたい」を入れた培地でやろうというのが彼の発案であった。

そのうちに翌年1月から3ヶ月、松山日赤へ出張させられた。やっと帰ってきたら、しばらくして鹿児島大学の下稲葉助教授が開業したので、その後にはいかないかと言われたが、お断りした。

次に前にインターンした国立大村病院へ行けということであった。医局長や医局の人と相談したら、2度断ったら破門されるぞと脅されて、行くことにした。履歴書を見てみると、昭和28年6月19日付けである。教室に在籍したのは9ヶ月足らずで、実働は半年にも満たなかった。短い医局生活であったがその後、九大温研、山口日赤と勤務は変わっても、どれだけ教室の恩恵に浴したか、計り知れない。樋口教授、占部教授には常に教室員を派遣していただき、改めてお礼を申し上げます。

特に、山口日赤病院へ赴任してからは7年間に多くの後輩が出張に来てくれた。昭和34年卒の幸田弘君らのクラスから始まって、昭和40年卒の末永義則君が最後であった。しかし惜しまれるのは、その中で既に4人が亡くなっている。これらの皆様との会合が山口日赤中溝会として長年続いてきたが、私も80歳になったので、去年で最後の会をした。私の体調が回復すれば、またゴルフでもやろうかとは考えている。

一期一会。教室には感謝あるのみ。

樋口教授没後の 三千枝夫人を偲んで

中溝 慶生
(昭和22年卒)

別府で九大を退官し、福岡に居住を移したのは昭和62年5月からである。それまでは樋口先生の

自宅を訪れた記憶はほとんどない。福岡に来てからも稀に訪れるくらいであったが、先生が病床に臥されてからは、夫人とお会いして話をする機会も多くなった。とくに先生の入院中は毎日欠かさず病室につめておられて、たまにお見舞いに行くと、昨日は久しぶりにお風呂に入ったなどと笑いながら、中溝先生がこられましたよと先生の手を握って言われ、ほら樋口がわかってますよと喜んでおられた。その介護ぶりに、これほど愛された樋口先生は本当に幸せな人であったと羨ましく思った。

先生が亡くなられてからは、今は亡き(株)ヘアサプライの矢山社長と一緒に自宅にお伺いして、先生の入院時のことなど、何度もお話を伺った。たまには外で食事しましょうと、ご友人の貝田教授夫人、宮崎教授夫人らと会食に出かけたりした。いけす「河太郎」に行った時には、樋口が病に倒れる少し前に、はじめて私を誘って食事に連れてきてくれたところですよと感慨深そうに話しておられた。また麻雀がお好きでよく誘われたが、昼ごろから夜まで少しも疲れた様子はなく、私の方がもうやめましょうと言うほどであった。その時は必ず「吉塚うなぎ」を注文されたり、お手製のカレーライスをご馳走されるので、何だか行きづらくなったが、お会いするたびにすごく喜ばれるので、またやりましょうと言って帰るのだが、私も体調を崩したりしてあまりお付き合いできなかったのが、今にして思えば残念でならない。最後に麻雀したのが平成4年で、今回は貝田教授邸でやりましょうと言ってお別れしたが、その約束も果たさないままになった。帰るときもタクシーを呼んで、運転手にチケットを渡して、これで送って下さいというような気の配りにはいつも恐縮した。

樋口先生の好物の芋で徳島の鳴門金時をお持ちすると、さぞ樋口が喜んでいるでしょう、先生がみえると樋口が帰ってきたような気がすると言われた。今にして思えば、もっと親孝行(?)してお話を聞いてあげればよかったと後悔される。しかしいつお会いしても、きれいに化粧されて、しみ一つないつやつやした肌は、とても80代、90代

の人とは思えない美しさであった。私も家内もお会いして帰るときに、いつも溜息まじりに驚嘆したが、その若さの秘密については、遂に聞き出せないままとなった。

日頃から、私は皆様に迷惑をかけないように静かにこの世を去りたいと言っておられたが、本当に弟子達が誰も知らない間にこの世を去って行かれた。樋口家はこれでなくなりましたという伝言を聞いて、一瞬言葉を失った。あの世に行かれて先生とお会いされたら、先生が亡くなられてからの十余年間の話をしながら、麻雀でも楽しんでおられるに違いない。



真菌との出会い

占部 治邦
(昭和23年卒)

終戦後間もない昭和24年の秋だった。第7回医師国家試験を終えた私は、大正2年に建てられた医学部正門横の木造二階建ての皮膚科教室を尋ねて、入局のお願いにいった。当時われわれ医学生は9月卒業で、1年間のインターンが課せられていた。

教授室で挨拶すると、1年前久留米大学から着任されたばかりの若い樋口謙太郎教授は、どういう方面を勉強したいかと尋ねられたが、とりたててこれといった希望はないと返答したように記憶している。

すると先生は、久留米医学会雑誌に投稿されたご自分の総説の別刷をとり出して、その一箇所を赤鉛筆でアンダーラインを引かれ、これを研究して外国に発表するのだといわれた。それはあとで確かめてみると、日本小孢子菌（鉄錆色菌）についての記述であった。

医局に戻ってくると、兄貴株の先輩連中が待ちかまえていて、どうだったかと尋ねられた。いただいた別刷を示して報告すると、とうとうあんたがつかまったか、みんなピルツ（真菌）に当らん

ように逃げてまわっていたのだと宣告された。入局早々から悪いくじに当って、がっかりしたのを覚えている。

当時ピルツを研究していた先輩は二人おられた。専攻生の森本藤一先生には滅多にお目にかからなかったが、半年先輩の桐生博光先生から巨大培養や懸滴標本の作り方などを教えてもらって、いっしょに勉強した。

今ふり返ってみると、われわれのその頃のレベルはお話にならないほど低いものであった。戦後間もない当時は、まともな教科書や参考書とてなく、日皮会誌の学術論文を唯一の手がかりとして勉強したが、手も足も出なかった。まさに混沌として五里霧中であった。樋口教授が研究室へ顔を出して指導されることはなかった。

先輩のM先生からは、教授室に習いに行かないほうがよい、といい渡されていたので、一度も尋ねていったことはない。何でも、M先生はたびたび、ときには英文の訳し方まで質問にゆかれたようで、とうとう「小学生のように何でもかんでも聞きにくるな」と珍しく先生からおこられたという話であった。

したがって私のピルツは、まったくの独学ではじまったといってよく、ずいぶん無駄な労力と時間をついやしたように思う。翌年坪井尚先生、岩崎博先生がピルツの仲間に加わった。

暗黒の3、4年がつづいて、やっと曙光が見えはじめた頃、樋口教授は2年後の昭和28年、福岡で日本皮膚科学会総会の会頭を担当されることとなった。われわれは宿題報告「抗生物質による梅毒の治療および予防」の研究に教室をあげてとりくむことになった。私のピルツの研究はここでまた足踏みをするようになった。

皮膚泌尿器科教室の思い出

東 健一
(昭和23年卒)

昭和24年、第6回医師国家試験終了後の入局である。畏友、桐生博光氏が、皮膚科は開業しても、往診がないから楽でいいよとの一言で入局を決意した。この助言に私は今もって感謝している。当時は戦後、間もない時代であり医師不足が幸いして、入局は簡単に承認された。

当時の教室は泌尿器科は富川教授、皮膚科は樋口教授と二人の教授制であり、助教授は泌尿器科は望月助教授、皮膚科は奥野助教授であった。

昭和24年と言えば、戦後間もない頃で、日本の国力は未だ快復せず、社会全体が貧困そのものであり、大学も例外ではなかった。

昼食は2階の医局で全員揃って食事をしていた。その席で学問や社会の話題を楽しく聞く事が出来た。この教室は予測していた通り本当に家族的な雰囲気になった教室であった。

富川教授の辨当箱の中身は緑色をしていて、多分、大根葉で増量した、お粥の様なものであった。私は米を食べる様な経済状況にはなかったので何時も手拵大の甘藷1個だけか、近所の用水路で釣ったザリガニ5〜6匹だけであった。

富川教授が「それは何かね」と問われたので「ザリガニです。差上げましょうか」と答えると即座に「いや、いらぬよ」と断られた。

石鹸もないので、何時も汚れ切った白衣を着ていたが誰も咎める者はいなかった。

この様な学内事情の中で樋口教授から皮膚吸収の研究をする様にとの御下命があり、兎の皮膚では、どうなるのかと考えて、九大開学記念日に、当時、通称、ワッセルマンと呼ばれていた研究室で兎を相手に、今考えると下らない実験をしていた所、突然、樋口教授がやって来られ、「他の者はどうした」と言われるので、「今日は大学は休日なので、皆、休んでおります」と答えると、先生は、「大学は休みでも研究に休みはないのだ。

皆に言うておくように」と声を荒げて立去って行かれた。敬愛する慈父の様な先生の叱責に驚いた。或る時、私が金もなく、器具もないのを嘆くと、パスツールは試験管一本で世界的な偉業を為し遂げたではないか、弱音を吐くなと諭された。

今は亡き諸先生のお話の一言一句を今も忘れず身に体し、深い感謝の念で、残りの生涯を全うしたい。

私にとっての皮膚科教室

岩崎 博
(昭和24年卒)

皮膚科教室が創立100周年を迎える今、遙か50年前、また25年前の昔を思い起こし感慨深いものがあります。

樋口教授時代の昭和30(1955)年、開講50周年を迎え、当時医局長だった私は2年ほどその準備に追われた記憶があります。当時、教室では有給助手・副手は20人ほどですが、全体では80人を超える在籍者を抱える大世帯でした。初めて自速会へ募金を呼びかけ、当時とすれば大金100万円ほど拠出して頂いたと思います。当日、皮膚科のあの階段教室には操、遠城寺、皆見、富川など当時の医学部、皮膚科教室を代表する各教授、名誉教授たちが揃い、博多帝国ホテルでの懇親会には懐かしい先輩たちの顔が満堂に溢れ、占部、皆見、百瀬ら教員は揃いの法被で当時、全盛の炭坑節を踊って喝采を浴びました。

時を経た昭和55(1980)年、占部教授の時代、開講75周年を迎えます。皮膚科、耳鼻科などの木造教室は既に無く、教室は新しいビル棟に移っていましたが、皆見、樋口、占部各教授の時代を3人で話すことになり、「樋口教授の時代」を受け持りましたので、こんなことを話しました。25年前のことです(於 医学部同窓会館)。「(前略)私が入局した昭和25(1950)年頃の樋口教室は、再帰熱接種マウスを使ってスピロヘーターのペニ

シリン療法をやられていた北村先生、牛の脳下垂体の浦橋先生、抗ヒスタミンの菊池先生、占部、坪井お二人の白癬菌、私の分芽菌（カンジダ）など実に多彩で、朝教室に出るともう、医局の机にはこれを読めと文献名をずらっと書いた教授メモが連日のように届いていました。旭教授以来、製作されてきた皮膚病ムラージュは九大自慢のコレクションでしたが、この頃の先端技術、コダックのカラー・リバーサルが現れ、鎌田、坪井両先生で取り組んでいましたが、強いライトを煌々と長時間患部に当てて撮るので患者も大変で、出来てくるまで一ヶ月掛かる状況でしたが、わずか数年で学会の症例報告はすべてカラスライドに変わってしまいました。昭和28（1953）年、樋口教室は「梅毒の化学療法」を宿題報告として総会を担当することになり、2年程このテーマだけに結集し総力を傾けます。各種抗生物質、無症候感染と予防、血清反応などそれぞれ分担して駆け出しましたが、1年位前から毎日全体のミーティングをやり、樋口教授から随分発破を掛けられました。40人以上のスタッフがこのプロジェクトに関わったと思いますが、全教室員一丸となって突っ走ったあの若い頃の思い出は何時までも忘れ難く懐かしいものです。（中略）教室75年の歴史において、昭和25年から昭和32年までの私がいた7年はほんの一齣に過ぎません。しかし益々御健勝な恩師、樋口謙太郎先生、占部、皆見、利谷、徳永、西尾、村山、宮崎、植松等々、皆同じ釜の飯を食い、苦勞を共にした仲間たちが、かく勢揃いして往時青年の頃の思い出を振り返ることのなんと楽しいことでしょう。」（中略）「当時、紅顔の青年医師各位、今は皆はるばる経てきた歳月に応じ、身体的変化も著明です。だが次に来る、教室百年への参加を初めから諦めることもありますまい。皆さんこの際大いに自重自愛し、なんとか25年後の開講百周年に滑り込むことを志そうではありませんか。」

爾来更に25星霜。既に樋口謙太郎先生、樋口三千枝夫人共に亡く、寂寥の想いが深いが、占部名誉教授初め多くの旧友たちが健在で、相集い、同じ時代への懐旧の思いを語りうることは幸いであ

る。

また、新しい大学の体制の中で、世界に向けて頑張っている古江増隆教授を中心とする皮膚科教室の更なる発展、同門先輩、後輩各位の益々の御健闘を期待します。

松田 正三

（昭和24年卒）

親が開業医なので医科への進学は迷いませんでした。戦時中でガダルカナル等、戦況不利となってきた時期でしたが、自宅から通える九大附属医学専門部に入学、軍医になって御国の為にと通学しました。

皮膚泌尿器科教室との縁は、疎開の時の荷物移動の加勢（ムラージュに火が入ったら大変だとおのび）、原爆後に来院される負傷の人達（夏休中の防空学生当直により体験）等でしたが、入局の決心は、学生の時フルンクロージスが劇的に治癒した経験（ペニシリンは無くカルボール軟膏使用）と、先輩方が囲碁やマーじゃん等を時間外に楽しんであるようなので決めました。

富川、樋口両教授の御指導を受けました。可は無く不可ばかりの勤務態度でしたが、富川教授から学位を頂きました。樋口教授からは樋口賞を授与して頂きました。当時の医局の関係者のなかで、これを持っているのは私一人です。と言いましても、麻雀の優勝のご褒美です。当時は年に数回先輩やプロパーさんが集って、医局主催の大会が開催され、六回の大会中、偶然にも五度私が一位になりまして頂いたトロフィーです。古い事ですが、一度は最後の上がり逆転したように思います。樋口教授は各方面からのお誘いがかかって、メンバー不足の時など御相手させていただきました。先自模（サキツモ）をなさらず、きれいで紳士的なマーじゃんで、名手でした。相手の手の内を読むのがお上手で、私の国土無双の待ちで、絶対安全牌と見える風牌を読みで（私の気配を感じて？）止められて、啞然としたことがあります。

大きく負けられたのを見た事はありません。各地の学会でもマージャンの腕を奮われていたようで、西日本新聞の青木秀前社長は、東京でたまたま樋口教授に付合って、帰福の飛行機をキャンセル(戦後初めての墜落事故木星号)、おかげで命拾いされたなど隠れた善行?もなさっています。

御蔭様で戦後の大変な時期をそれなりに、暢気に過ぎて頂き感謝しております。



亡き父、 皆見省吾の思い出

皆見紀久男
(昭和26年卒)

私には父の思い出が多いようで、案外少ないようです。戦前は夜おそくまで二階で仕事と勉強をしていました。隣りは整形の故神中教授宅で、やはり、おそくまで明かりが見え、負けずに頑張ると良く言っていました。残念ながら両家とも空襲にあい、焼夷弾を落とされ完全に焼失しました。その後は知人を頼り転々と移り住みました。戦後やっとの思いで、廃材を集めて元の焼けあとに小さな家を建てるのが出来ました。その後部屋をつぎ足し現在にいたっています。苦労して家が出来た頃、大学教授を辞めて開業を決めました。昭和24年ごろの事と思います。馴れない開業で大変苦労をしたようですが、次第に患者さんも増えてゆき、さらに色々の仕事を作りました。(1)日本皮膚科学会で皆見賞を設定。1年間の論文の中から優秀なものを選び、賞を与えるもので、現在も選考委員会で決めて、学会で表彰されていますが、永遠に続くことを希望しています。(2)以前のインターン生の中から選んで奨学資金を出したこと。(3)開業医の有志と共に毎年、九大教授を招待して常盤会と名付けたこと。この会は発展して、福岡市のお正月行事として現在も行われています。昔はお正月に、わが家に皮膚科、泌尿器科関係の方々が集って盃を汲み交わしたこともあり、これ

も懐かしい思い出となりました。

開業後も地方会に臨床瑣談と題して、症例を色々発表して小論文も書いていました。たまたま声がかすれ、首のリンパ節がはれるなどの症状が出て、耳鼻科で喉頭癌と診断され、手術となり、九大耳鼻科教授の執刀で全部摘出されたということで安心しましたが、喉に穴が開き、声を出すことが出来ず、九大耳鼻科の発声教室に真面目に通い練習をしましたが、なかなか難しいようで、思うように発声ができず、しかも診療も続けるというので、患者さんとの会話も筆談で頑張ったのには頭が下がります。大変だったと思います。しかし14年後に肺に転移し再入院しましたが、その時は放射線科でX線照射を受け、次第に衰弱し、遂に昭和50年9月6日に天に召されました。今もそのきびしかった日々が、昨日のように思い出されます。あのころ父を支えていただいた諸先生、樋口先生、高岡先生、富川先生、百瀬先生、原三信先生もすでに亡くなられ、心淋しい感じがします。



過渡期その頃

局 幹夫
(昭和26年卒)

私の入局した昭和27年にタイムスリップすると、日本が講和条約の締結により漸く自主独立を果し、特需や炭坑景気で復興の兆しがみえてきた戦後の過渡期であった。しかし未だ食糧事情も厳しく自宅の小倉から約2時間かけて通勤していた。その年の入局者は皮膚泌尿器科としては多く14名だったかと思うが、現在活躍中の者は約半数となり寂しい限りである。

新入局者の勤務体系としては泌尿器科との分離はなく、両科にまたがって皮膚科は北村憲一医局長、泌尿器科は江本医局長の指示によって勤務した。皮膚科での主な仕事は樋口教授、奥野助教授による新患診察のカルテの口述筆記と患者に対する説明、外来患者の処置、光線療法、雪状炭酸処

置、ラジウム治療管理、手術の助手など。また講義係はムラージュの取り揃え、患者供覧の手伝いと、結構忙しい毎日であった。午後は昼食をはさんで各種報告会、抄読会などあり入院患者対応、研究室での研究、文献の検索などで大体一日を終える状態であった。

収入面では暫くの間は無く、アルバイトで凌いでいたが助手になって安定した収入が得られた。初任給は約1万4千円くらいであったと記憶しているが、当時の物価から考えると何とかやりくり可能であった。

勤務の終える夕暮れ近くになると緊張も弛み、こっそり当直室や密室で雀卓を囲むのも楽しみの一つで野次馬も加わって、打興じた懐かしい思い出である。呑んべえ組は、ネオン瞬く中洲界限に足を運びバー、キャバレー、クラブ等を徘徊し中には勢いで春吉、対馬小路、大浜へとメタスターゼし、朝帰り出勤する御仁もおられた。

娯楽、スポーツ趣味の分野では現今と比較するとあらゆる点で隔世の感があるが、当時はパチンコ、映画、ダンス、麻雀などが盛んで、パチンコを除いては衰退の一途を辿っている。1年後には、テレビが初めて放映され、購入には1インチ1万円では一寸手の届かない存在で、自動車やゴルフ等は高嶺の花であった。ともあれ物には恵まれない時代ではあったが、相応の心豊かな日々を過ごすことが出来たように思う。

皮膚科入局のことなど

植松 一男

(昭和30年卒)

昭和30年に卒業し、インターンでの各医局廻りのあと、どこにするか迷った。生物学のような暗記ものは不得意で、好きで医学部に進学したのではなかった。

当時、工学部などを出ても、就職先は造船、石炭、製鉄くらいしかない敗戦後の就職難時代で、

ソニーなども、東通工とって、大きなリール式の録音機を作っている小さな町工場にすぎなかった。医師になって開業すれば、生活できると考えたのである。

家は現在の博多駅の近くで農業をしていたので、大学を卒業するまで、家業の手伝いに忙しく、クラブ活動などには無縁であった。当時の農業は全部人力で、労働は過酷であったので、他の仕事なら何でもよかった。

さて、何科を選ぶかになって、「住所の近くには耳鼻科がないので、開業にはよいから」と岩本助教授に勧められたが、あの狭い所を覗く辛気くさい仕事には気が進まなかった。

合同医局説明会で、皮膚科医局長の岩崎博先生の、「すぐ助手になって給料をもらえるし、開業するにも医療器機がいらす簡単でできる」との話で、皮膚科に決めた。

当時、保険制度が完備しておらず、われわれは子供の頃から、よほどのことがない限り医師に診てもらうことは無かった。大抵は、家にあった富山の置き薬ですましていた。まして湿疹、カブレ、水虫などの皮膚病くらいで、医師にかかるなど考えられなかった。

それで皮膚科は不人気な科で、100名の同級生で、入局者は私一人であった。(外科36、内科32、整形9、婦人6、耳鼻、小児、精神3、その他)

これで、開業して生活できるのかしらんと考えていたが、昭和36年、国民皆保険制度がしかれ、皮膚科も患者が急増した。

昭和39年に開業したが、専門医院が少なかったもので、当初よりかなりな患者が来た。当時は、税制の特別措置法もあり、5、6年も働けば粗末ではあるが土地付の家が建てられた。その家に今も住んでいる。

その後、教室は医学部紛争やカネミ油症事件などの激動の嵐にみまわれた。最近出版された「検証・カネミ油症事件」(川名英之 緑風出版)を読むと、この奇病のむつかしい診療に携わった当時の教室員に対する激しい非難が書かれているが、後になればなんとでも言えるのである。



ゴルフ入門

師井 庸夫
(昭和30年卒)

昭和37年頃、細菌、衛生、寄生虫教室の建物の裏に2人が打てる広さのゴルフのインドアがあった。誰がどうしてこのような立派なインドアを造ったのか詳細は知らない。教授連中の練習場で、暇が出来た教授がここで球を打っていたようである。たまたま、樋口教授がゴルフ部の幹事になられて、プロに教えて貰おうということになったら、週1回プロに来てもらうことにしたが、教授連中は忙しいので、もしプロが来て誰もいないということになったら、プロに失礼になるので「君達もゴルフを始めろ、どうせ勉強はしないんだらう」と言われて5番のクラブ1本買って、ゴルフを始める羽目になった。そろそろゴルフブームになるという時期であり、学生時代にホッケーをやっていた関係でゴルフはやってみたいと思っていたので、あまり抵抗もなく始めることができた。

インドアではびしびし当たるようになったので少し自信を持って打ちっ放しに行った。そこで、私の打球は猛烈なスライスボールであることを知ってがっかりした事を覚えている。この時、皮膚科でゴルフを始めたのは皆見、吉田、矢幡の諸氏である。泌尿器科も何人か始めた。最初にコースに出たのは教授会のコンペの中に入れて貰って、春日原ゴルフ場にラウンドしたのがこと初めである。この時のスコアは65程度であったことを覚えている。当時ゴルフのハンディは始めた歳の半分になると言われていて私は31歳であったので、その頃のハンディ15になるなんて夢のようなハンディだと思っていた。昭和38年宮崎市に勤務することが決まり、樋口教授から「お別れだから、ゴルフに連れて行ってやろう」と、こっそり教室を抜け出し、市内のT先生と3人で、未だ芝が生え揃っていない久山ゴルフ場に連れて行って貰い、ティアップしながらラウンドしたのも懐かしい思

い出である。



昭和元祿

五島 應安
(昭和32年卒)

昭和40年前後の中洲には爛れるような甘い色香が漂った。その中心は博多川沿いのキャバレー・赤い靴であろう。雨が降っても槍が降っても、とめられない、やめられない。何処から金が出ているのかと下司が勘繰るほどに遊んだ。私だけではない。某科の有名講師は教授の娘を離婚して赤い靴の女性と結婚した。交通事故に遭ったようなものと言ったが、私は事故には会わなかった。

昭和元祿、ずんだれた自由が懐かしい。生化学の山村雄一先生は、凡人が何時勉強されるのかと思う程に足繁く通われて、阪大に移られる際には、赤い靴が送別会をしたと言う。「夢見て行い、考えて祈る」は、先生の座右の銘である。

樋口謙太郎先生が目掛けておられたホステスが、メンタイコ屋の息子と一緒に中洲市場で食べもの店をはじめた。先生のお伴をしたが煙と湯気が立ち込めて、とても気の利いた店とは言えない。店を出て、中洲の通りを並んで歩いていると、先生は「大した男じゃないなあ」と呟かれた。何に鑄をけずっておられたのか。メンタイコも当時は今ほどに人気がなかった。現在は10軒もの支店があって大繁盛。しかし、男の浮気ははじまって別れたと聞いた。玉の輿に黙って乗っておくのも容易ではないのだろうか。

大学東門から公園の方に少し歩くとユーハイムというコーヒー店があった。その二階が梁山泊で、先生を中心に麻雀が開帳された。博多は狭いもので、私の所在などすぐに突き止められる。途中で電話がかかる。ゴトウ君が博奕を捨てて女性のもとにいけるものですかなどと与太を飛ばしながら牌を振られた。

教授室から電話がかかる。出掛けると机の上に

五目のいなりが置いてあった。君だけじゃあないよ。僕だって、綺麗どころから差し入れがある。先生は大正デモクラシーに生まれた自由人であった。

麻雀は先生と共に、京大の大藤重夫教授と手合わせしたことがある。大藤先生は若い頃は名人と言われたが、神様になって弱くなったと言っておられた。昭和39年、原宜之君を誘って、京大に大藤先生を訪れたことがある。君は私の教授室に最初に来たお客さんだぞと言って、以後、目を掛けて戴いた。当時、京大から出ていた皮膚科学の教科書に私の論文が紹介されていたからである。

私は入局後、国立予防衛生研究所でブドウ球菌のフェージ型別法を学んだ。実習上、多くの菌株を持参するように言われたが、九大には膿皮症患者はあまり来ない。京大の山本俊平教授の論文に細菌性湿疹の概念があった。したがって、アトピー性皮膚炎、貨幣状湿疹、それに膿皮症の分離菌の型別を行った。既に、トビヒがフェージ71に溶菌域を示す、特殊な菌株—Impetigo coccus—によって惹起されることは報告されていたが、アトピー性皮膚炎からの分離菌はⅢ群ブドウ球菌であった。この群の菌株は深在性膿皮症からは分離されない。逆も真なりである。コアグラゼ陽性のブドウ球菌に化膿を起こす菌と、そうでない菌があることを知った。文献的に食中毒からの分離菌がすべてⅢ群ブドウ球菌であることは知っていた。これは1958年のことである。エンテロトキシンがスーパーアンチゲンであるとの報告は、1989、90年のことである。



回 顧

御厨 正夫
(昭和32年卒)

時の流れは早く、40数年前、医学部卒業時「朋あり遠方より来る、また楽しからずや」と筆した寄せ書きを、アルバムの中で振り返ってみました。

九大病院でインターンを終え、当大学医学部皮膚科の泌尿器科学教室に入局して、大学院で皮膚科学を専攻しました。当科には、奇しくも「朋あり遠方より来る」に由来すると思われる自遠会という同門会があって、今でも毎年皮膚科・泌尿器科それぞれに恒例の会として催されています。医局で研鑽を積み、巣立って独立した仲間たちが、あちこちから集って旧交を温めている会であると理解しております。

私が在局当時は、各科とも別棟で皮膚科・泌尿器科学教室は、医学部正門のすぐ左側で構内の道路沿いにありました。明治時代の面影を残す風格のある木造の洋式建築物でした。昭和40年前後までは教室の開講記念行事は、皮膚科・泌尿器科の合同でとり行われていました。なお、現在の西部支部学術大会は、西日本皮膚科・泌尿器科連合地方会の名称で開催されていました。

当時、教室の開講記念行事は玄関入口のそばにあった階段教室で開催されています。ここは、移動してやってくる学生の講義室でもあり医局員は、当番でムラージュ（皮膚病の模型）など講義の材料を準備して同席したものです。夏期の講演会では、教室内に大きな桶が用意され山のような氷塊を立てて、天井からゆるやかに送られる回転式扇風機の風で暑さを凌いでいたと記憶しています。講演会終了後は、教室玄関の正面を背景にして記念撮影をしています。

その後、20数年の歳月を経て、九大医学部ならびに付属病院は、各科とも合同で近代化されて堂々たる建築物となりました。

九大皮膚科教室開講80周年記念講演会は、さらに新築された同窓会館で開催されていてその会館前の広場で記念撮影をしています。この間、時の流れと共に皮膚科・泌尿器科は、完全に分離されていますが同じ釜の飯で育った先輩友人との交流は、今もなお続いています。

私は在局当時、梅毒血清研究所をもつ皆見医院に寄宿して恩師の恩師である皆見省吾先生の御指導もうけました。先生は、謹厳ではあるが非常に温厚なるお人柄であり晩年に至るまで学問に献身的でありました。先生の臨床瑣談は講演会の度に

楽しみにして拝聴しました。

恩師樋口謙太郎先生は、親分肌のお人柄であり、花の30代という言葉が口癖のように云われました。あれほど素晴らしい業績を残しておられる先生が今度、生まれ変わることがあれば30代に悔いのない事業を成し遂げたいと云われたことを思い出します。若い者への餞の言葉ではないかと感銘させられました。又、先生は文士であることも広く知られています。子供さんがいなかったので随筆を子供のように作られました。嘗つて、樋口教授を囲む会では、皆見紀久男先生の音頭で毎年お会いすることを楽しみにしていました。

時の流れは早く、今年は皆見省吾先生の30周年となります。当時を回顧しながら在りし日の面影を偲びつつ、謹んで両先生の御冥福をお祈り申し上げます。

今や、九大皮膚科学教室に入局して約半世紀になろうとしています。不肖の身ながら、良き師、良き先輩、良き友人に恵まれて大過なく過しえたことを感謝しています。

最後に、九大皮膚科開講100周年を迎えるに当たり、伝統ある九州大学医学部皮膚科学教室の益々の御発展と同門会員皆様の御健勝を祈念するものであります。



第一回医真菌学 講習会の思い出

吉住 正子
(昭和33年卒)

第一回医真菌学講習会は、昭和39年（1964）9月30日、10月1日、2日、九州大学皮膚科樋口謙太郎教授を会長として福岡市で開催されました。はじめに樋口教授の「病原真菌学の概念」、ついで久留米大学占部治邦教授、金沢大学福代良一教授、国立京都病院耳鼻科部長山下憲治先生、横浜市立大学内科福島孝吉教授、東北大学高橋吉定教授の講義がありました。テキストは各々の真菌の

形態学、分類、一般検査法が詳細に図、写真、表などと共に書かれ、103頁ありました。

実習は病的材料による直接鏡検、培養菌による鏡検、スライドカルチャー、供覧はウッド光線検査、病理組織標本、巨培養、糖発酵試験などでした。受講者は何名であったか憶えていませんが、受講者が用意するものに「試験管入れ」があり、「代表菌株を渡すので40本くらい立てたまま持ち帰りが出来るよう紐と箱をご用意下さい」とあり、人数×40本菌培養したことになります。とにかく、菌培養をするのに日曜祭日返上で準備したことを思い出します。たしか山下先生からは「標本の出来具合をみたいので送るように」とのことで送りましたが、「〇〇と△△は発育しすぎているので、もう少し前の状態のを用意して下さい。」とのことでやり直しました。

福島先生のコクシジオイデス症では、地理的分布はカリフォルニア、テキサスなどの砂漠的風土で飛散し呼吸道感染を起こし、研究室感染も重要であると、供覧のみ。免疫の無い日本人は危ないので試験管を割ったりしないよう注意とのことでした。

占部先生担当の癩風は現在は好脂性で、オリーブ油重層サブロウ培地で培養できますが、当時は「培養——できない」でした。

最後は西ドイツ、ミュンスター大学の Hans Goetz 教授の「ドイツにおける真菌症」でした。汗だくで走り回っていたので、第二回講習会には是非受講者として参加したいと思いましたが、すぐには行われなかったと思います。40年前のことで今は準備もやりやすいことと思います。テキストには今は使われていない懐かしい薬品の広告が見られます。

講習会は初めてで準備にまごつきましたが、教室員一同、皆見紀久男先生、植松一男先生、原宣之先生、故矢幡敬先生、検査技師、補助員の皆さんで全員で力を合わせてしました。そして忘れられないのは当時久留米大学教授でいらした占部治邦先生と故安元助教授（安元慎一郎先生のお父上）、丸田先生その他が力になって下さったことです。

私事ですがこの年、1964年は東京オリンピックの年で日本中が活気に満ちていました。私は講習会を終えて11月に第二子（長女）を出産しましたので、医真菌学講習会、東京オリンピック、長女誕生が一塊で思い出されます。

梅毒研究始末記

幸田 弘
(昭和34年卒)

九大皮膚科教室の主要な研究テーマの一つに梅毒がある。私は昭和35年に入局し、梅毒研究グループに属したが、当時はペニシリンの普及と敗戦にともなう鎖国状態により、顕症梅毒は消滅し、研究テーマはいわゆる抗療梅毒と、梅毒の病原体TPを抗原とする特異度の高い血清反応の開発であった。抗療梅毒に関してはすでに、吉田守男先生が研究を進められており、私どもは皆見紀久男助教授のご指導のもとで都外川幸雄先生はTPIテストを、私はFTAテストの研究を行うことになった。当時研究に必要なTP株は消滅しており、研究は金沢大学細菌学教室に擧丸にTP株を接種した家兎梅毒を貰いに行くことから始まった。丁度その頃から、海外との交易が再開され船員によって新たな梅毒が持ち込まれ、昭和36年から戦後第2次の梅毒流行がはじまった。この時に感染した多くの顕症梅毒について、新たに開発された数種の抗生物質の治験を行うことができ、またFTAの多くの臨床データを得ることができたのはまことに幸運であった。この流行はペニシリンをはじめとする各種抗生物質によって数年後には沈静化した。ペニシリンの駆梅効果はMahoney（昭18）によって発見されたが、その殺菌力（ $0.003\mu/ml$ ）の強さとTPには薬剤耐性が生じないことから、駆梅剤のクイーンとしての地位は不動のものであろう。

その後、FTAは各国で研究が進み、さらにTPの蛋白成分を抗原としての凝集反応である

TPHA（昭41）が開発されて、特異的梅毒血清反応の問題は解決された。当時TP接種家兎は100羽近くまでなり、旧皮膚科教室の裏口にあった動物舎でおからを餌に飼育していたが、昭和48年中央実験動物施設設置にともない、学内における実験動物の一括管理がはじまり、昭和50年11月旧皮膚科教室の取り壊しにより動物舎も消滅した。TP株はその後、中央施設で細々と家兎擧丸に植え継いでいたが、昭和55年、私が佐賀医大へ出向した後を継ぐ者はなく、TP株は消滅した。実験家兎梅毒を用いての最後の論文は「Cephalexinの病原性TPに対する効果」（昭48）である。

開講以来九大皮膚科教室が梅毒に関する多くの研究が行えたのは、ワッセルマン研究室があったからと考える。同研究室は初代旭憲吉教授が大正5年に教室内に設置し全学の梅毒血清反応をここで行うようにしたものであるが、同時に梅毒研究の場として機能し多くの論文が誕生した。ワ氏室は昭和45年中央臨床検査部に移行しその役割を終えた。

ペニシリンの発見とFTAおよびTPHAの開発によって梅毒に関する主な問題は解決された。九大皮膚科教室開講以来続いた梅毒の研究はTP株の消滅した昭和55年（1980）をもって75年間の歴史に幕を閉じた。なお、Ehrlich-秦によって明治43年（1910）に創製されたサルバルサンはペニシリンの登場によってその役割を終え、第一製薬は昭和48年（1973）をもって製造を中止した。



駆け出しのころ

旭 正一
(昭和36年卒)

東京で1年インターンをして、昭和37年に皮膚科へ入局した。福岡へ戻ったのが3月末日で、大学院の願書提出の締め切り日であったが、東京遊学で忙しく、まだ志望する科が確定してなかった。以前から、樋口教授はいちおう知っていたし、急

いで学内の事情でもお聞きして、入局に関するアドバイスを頂こうかと思ひ、教授室に顔を出すと、「おお君か、君は皮膚科だろ。医局長の所へ行こう」と言われ、何となくついて行くと植松先生が、「ああ1人ありましたか。今年はゼロかと思った。よかったア」と喜んで下さり、そうってから「まだ決めてないんですけど」とも言いにくくて、そのまま黙っていたという、実にいい加減ないきさつで、皮膚科入局が決まった。

大学院といっても、すぐ山口日赤に出張になり、日給850円を頂戴した。1年後に九大へ戻り、新入局員の雑用係の暮らしが続いた。外来、病棟、研究室はまだ開講以来の古い木造の建物で、泌尿器科と共同であった。皮膚科の教室員にも、泌尿器科の入院患者の割り当てがあり、導尿や膀胱鏡もやった。回診も、皮膚科・泌尿器科の両方で教授回診、助教授回診があるので、けっこう忙しかった。夜は医局の風呂に入り、畳敷きの当直室で、先輩の麻雀を観戦したり、碁を打ったりした。当直の晩は建物内を巡回するのだが、広いムラージュ室は、不気味で中へ入れず、戸口からそっとのぞき込むだけで逃げた。

そのうちに樋口教授に呼ばれ、皮内反応抗原の精製というテーマを頂いたが、まず生化学や免疫学を勉強したいと申し上げると、それなら山村君に頼もうと言われた。山村雄一教授は、私の学生時代に大阪から赴任して来られ、その名講義と人間的魅力で学生を魅了し、人気ナンバーワンの若手教授であったが、ちょうどその頃、母校大阪大学の第3内科教授として九大を去ることが決まっていた。樋口先生が山村先生に頼んで下さって、山村先生の指示で、大阪大学の癌研究所（山村先生が所長を兼任）で実験を習うことになった。こうして大阪で2年余りを過ごし、学位論文を作ったが、阪大の癌研、山村内科、理学部蛋白研など、学問的なアクティビティの高い研究室の雰囲気味わったことは大きな刺激になり、学問の考え方が一変するほどの影響を受けた。

私の医者人生の出発点である「入局」や「研究」は、このように自分の意志というより他動的な要素で決まって行った。あたかも流れに浮かぶ

木の葉のように、押し流されるままに漂いながら今日に至っている。いささか自主性を欠いた点は慚愧の至りであるが、別に後悔もしていない。まことに住めば都、人間万事塞翁が馬である。



医局時代を振り返る

瀧 曠二

(昭和37年卒)

動物皮膚比較解剖組織化学に嵌まっていた関係上、インターン時代から西尾一方先生に師事。入局迄に分厚い独逸語文献熟読指示。無理。長年悩むアトピー性皮膚炎を植松先生に相談。オイラックスHで治癒。難治性・抗療性へ増悪する最大の要因は治療（強力薬効コルチコステロイド外用剤開発による）。ネーベン（師井先生の名義拝借にて高収入。感謝。

樋口教授門下生として大学院生入局。当時、G医局長。強烈な印象。同期に小宗・丸岡先生。ネオン下でのみ遭遇は七不思議の一つ。原・都外川先生から臨床の手解き。治験も仕事。外来カルテより患者名・病名・治験薬・薬効データを拾い、ムラージュ室にて作製。U先生ご自慢の治験マニュアル空欄にデータを埋める作業で完了。治験終了後は皆見助教授に同伴して、夜の街ハシゴ酒。

昭和38年10月助手。39年4月山口日赤・九大温研に長期出張（島流シ）。中溝・利谷・局先生に処世術を学ぶ。悪銭身につく。利谷助教授九大へ。伊藤教授停年退職。学位論文完成するも提出先不明。矢幡先生温研に入院。日中はゴルフ、夜は別府繁華街徘徊。善き時代。そろそろ温研皮泌科も終極様相。年金皮膚科江口昭二先生より後任依頼。了承。医局とは無縁人事との事。関連病院として週一日医師派遣の由。

年金皮膚科は医師3名体制で皮膚病の宝庫。就任当初より硬性下疳、尋常性狼瘡、ハンセン病、菌状息肉症など何でも御座る。ATLは北九州第一号。瀧・幸田連名で他科地方会へ発表予定。年

会費2名分請求のため中止。内科へ譲る。診療は暗中模索の中、幸田・佐藤先生の応援。両先生北九州を去ったあと石坂隆先生の力を拝借。臨床皮膚病理に慧眼幸田弘教授は、医局員全員を引き連れ週一回応援。西尾教授は週一回ベテラン医師二名を派遣。福大医局も土曜日応援。すると九大医局は週三回（月水金）医師派遣。西尾シューレは時間制限のない夜間習練の場。病院が国際学会（墨西哥・韓国）出張命令。H先生いわく銃後は任せなさいと。感激。以来、平々凡々の診療。

北九州市保健福祉センターより勧誘。困惑。医局K、K、Y3先生から年金退職勧告。あとは我々医局が責任をもって死守すると。神風。N院長に報告。翌日堀嘉昭教授年金皮膚科へ。激怒。事情説明。3名を医局から追放すると。口は是れ禍の門。苦労もなく後任はY先生に決定。以降、徐々に九州厚生年金病院皮膚科は尻窄まり龍頭蛇尾。現在は開業医レベル。北九州市役所退職時、共済年金問題発生。西村正幸先生の御尽力により昭和38年10月～46年3月間の医局在籍証明書を受領。年金問題には原資の知識も必要と痛感。現在、精神病院に勤務。薬剤副作用は日常茶飯事。薬剤情報に情熱を燃やすF先生は赫赫の皮膚科医。ただし抗精神病薬は原因薬中止はほぼ不可能（中止で不穏・暴力行為発生の為）。中止のない対処が不可欠。

人生は夢の如し。光陰箭の如し。



今は昔

小宗 義之
(昭和37年卒)

教室開講100周年おめでとうございます。

私が入局したのは、八幡製鐵病院でのインターン後、昭和38年3月である。当時、日本経済は高度成長期の真っ只中であつた。丸岡和也、瀧曠二君と同期の櫻である。

第3代、樋口謙太郎教授をはじめ、皆見紀久男

助教授以下西尾、植松、五島、師井、都外川、原、吉住、矢幡、幸田、村本、佐藤、旭の諸先生方がスタッフであつた。主に原先生より指導を受けた。

外来教室は洋風の木造二階建てで、大学病院西正門の左手にあつた。教室正面玄関前は楠の大木がうっ蒼と繁り、その中に初代教授の旭憲吉先生と高木繁先生（ウロ）の胸像があつた。今は倉庫に眠っていると聞く。

玄関上り口は天井が高く吹き抜けになっていて、両端には下駄棚があり、スリッパに履き替えていた。正面廊下を挟んで、左側が皮膚科、右側が泌尿器科になっていた。玄関両端に広い階段があり、床は丸く、すりへつていた。2階右側に助教授室があり、暇があれば、そこでよく駄弁つていた。その隣にムラージュ室があつた。ムラージュはスライド写真が余り普及していなかつた時代、教材用に作製されたものである。名人気質の職人さんがいて、石膏で本物そっくりに作つていたと聞いている。皮膚結核、悪性腫瘍、梅毒、感染症、真菌症などの標本が雑然と置いてあつた。当直の時、暗い部屋に入ると薄気味悪かつた。

外来は玄関、右手受付、その前予診室。奥に「皮膚と泌尿」（現在の西日本皮膚科）編集室があつた。処置室、診察室、手術室、当直室と続き、その奥にL研（梅毒研究室）の部屋があつた。実験器具が所狭しとあり、都外川、幸田、中山（ウロ）先生がラットの睪丸にスピロヘータを移植して実験されていた。

入局3ヶ月ほどたつた頃、医局長より、皆見病院に手伝いに行けと命じられた。第2代皆見省吾教授は昭和23年定年退官を待たずに開業されていた。先生は言うまでもなく、日本皮膚科学会のリーダーであられた。恐る恐る挨拶に行つたら、ニコニコして一言「よろしく」と、言われたのを昨日の様に覚えている。医院は大繁盛して、一日300～400人の患者が来ていた。手伝いといつても、処置と注射係で、血管の出ない患者がいて、もたもたしていたら忽ち6～7人患者が並ぶ始末であつた。時々珍しい患者が来ると「小宗君」と呼ばれて、説明して頂いた。先生は地方学会の時には必ず臨床瑣談を述べられていた。皮膚科学の

エッセンスであった。

先生の命日は昭和50年9月6日であるが、皆見医院に手伝いに行っていた者で省吾会をつくり、先生を偲んで、命日に近い土曜日に参集して懇親の輪を広げている。省吾会も早や30回になった。

当時、九大皮膚科、皆見医院も例外なく部屋は一種独特の臭いがしていた。昔はタール剤、チンク油を基剤にして他の薬剤を混ぜて外用剤を作っていたので部屋中に臭い、油がしみ込んでいてドア、壁、床などピカピカに光っていた。あの頃の臭いが懐かしい。



昭和43、44年頃を 振り返って

北村 公一
(昭和38年卒)

「ドカアーン」と大音響とともに暗闇のなか、本学の方面に火柱があがった。昭和43年6月2日の当直の夜、7階皮膚科病棟の詰所からぼんやりと夜空を眺めているときであった。工学部に建設中の大型電算機センターの工事現場に米軍機が墜落したことが翌朝判明した。この事件はこれまで凡々と医局生活を送り大学院卒業後すぐに医局長に推された小生にとっては多忙な生活の幕開けであった。

インターン制度廃止、登録医制度反対、大学治安立法反対、九大学長選挙問題等による大学紛争の激化の時期に皮膚科教室は昭和43年10月の油症事件と昭和44年11月開催の第19回日本アレルギー学会総会の準備を抱えていた。

油症については43年6月に最初の患者が受診、10月に未曾有の事件の様相を呈すると樋口教授が直ちに全学あげての研究班設置を提言され、五島応安講師が先頭に立って診療にあたられた。マスコミは連日奇病発生と報道した。その報道内容も受診者＝患者と誤解(?)して万を超える患者の発生と報道されたため各地からさらに多数の受診

者がおとずれ油症研究班によるスクリーニングは大変であった。医局長室の前には終日新聞記者の張りこみがあり、顔をみると付きまとわれた。未曾有の大事件にもかかわらず集学的取り組みによりわずか2週間で原因がつきとめられたことは驚嘆すべきことであり、これも当初より原因を塩素化合物と疑われた樋口教授の炯眼に基づくとっても過言ではない。最近日医新報で油症の現状についての報道を目にして油症の根深さを改めて知り「油症研究30年の歩み」を読んだ。小生のなかでは油症が風化していたことを反省している。

アレルギー学会総会の準備は大学紛争や油症への対応のなかで行った。領域が医学部の基礎から臨床の各科にわたるのでその点でも対応が大変であった。病院内は集会、団交、研究室封鎖等不穏な状況にあったのでわたくしのカローラに学会準備資料一切を載せて樋口教授のお供をし、学会の準備とお願いにまわった。利谷助教授とアレルギー学会理事会に総会の企画と準備状況の報告を行った際には、日大三浦修教授をはじめ皮膚科の理事より学会当日の人員援助の申し出と激励をうけ非常にありがたかった。大学紛争の目標の1つに学会粉碎があり学会会場の混乱防止には腐心し、いろいろな方面の方々のアドバイス、援助をうけた。樋口教授のアイデアで学会2日目19時から21時までのラウンドテーブルディスカッションを2題企画、学会ナイターをおこなった。予想以上にどちらも会場がいっぱいになり22時近くになっても熱心な質疑が終わらず、22時で打ち切りになっていた。学会当日の運営が順調に運んだのは応援していただいた久留米大学と鹿児島大学の方々の御蔭と感謝している。

昭和39年に入局以来7年間教室にお世話になりました。その間医真菌学会クルズスの準備、雑誌「皮膚と泌尿」から「西日本皮膚科」への移行と編集、真菌研究、走査電顕、重症熱傷の治療、らい指定医(当時)、ベッドサイド教育などに諸先輩のご指導をうけ、当時の同僚とともに苦労を重ねた事柄が思い出されます。

昭和46年樋口教授のご退官後にお許しを得て大阪に帰りました。その後の人生の糧は上述の頃に

得たものと思っています。



入局当時の思い出

田崎 高伸
(昭和38年卒)

以前の皮膚泌尿科の建物はなつかしく、これがなくなって新しい建物が出来てから、医局が遠くなった感じです。

入局したときには、私と中垣先生だけが独身でしたので、よく一緒に当直？しました。とくに年末や正月は二人で病院住まいをしました。以前は患者さん用だった風呂に入り、置いてあったモノゲン（ウール用の洗剤）で体を洗ったり、患者さん用の物干しに洗濯物をかけたり、泌尿科の婦長さん（独身で住み込み）に夕食を食べさせてもらったりしました。

まず主治医になったのが重症の有棘細胞癌の患者さん3名で、腫瘍も大きく感染もひどく部屋中が臭気にみちていました。Obenの先生がメトトレキセイトの動注療法に熱中していて、切断を望む患者さんとの間にたって新入局の私は困ってしまったこともありました。一人は独断で外科にお願いして腕の切断をしてもらいました。彼は退院のとき、私だけに挨拶をして帰りました。後の二人はなくなって私がみとりました。Leiterの先生と解剖に立会いましたが、リンパ節転移ははっきりしなかったと思います。この先生は有棘細胞癌は転移しないとの仮説をたてていたのかも知れません。

私は研究テーマとして皆見助教授から単純ヘルペスの迅速診断をしてはどうかといわれて、ウイルス学教室の森教授に紹介してもらいました。

今では考えられないことですが、午後3時ごろから遅いときは夜中の2時ごろまで研究に取り組みました。1年間はポリオーマウイルスの研究を手伝いながらテクニックを習いました。組織培養に必要な血清も牛の血液をろ過してつくりました。

ウサギを感作して抗ヘルペスうさぎ血清を取り出しました。ガンマグロブリンの精製は旭先生に新しい方法を習ってしました。蛍光色素をつける方法や、濃縮などは幸田先生に習いました。

6畳あまりの氷室に土曜の午後閉じ込められて、死ぬかと思ったこともありました。ドライバーと鉄の棒があってテコの原理で厚いドアを開ける事が出来たときにはほっとしました。蛍光顕微鏡で時間の経過とともにヘルペスウイルスの増殖が認められたときには感動しました。

この後はドイツに留学させていただいたので、大学紛争などは全く知らないで過ごしました。帰国後体調も悪く医局の変化にもついていけず、温研に就職しました。ここでは中溝教授のもとで電顕、走査電顕（当時は珍しかった）も使って、よい仲間にもまれて楽しい研究生活をさせていただきました。国立福岡中央病院にも3年いましたが、父が死んで宮崎で後を継いで開業しました。よい同僚や先輩に恵まれてわがまを許してもらった時代を懐かしく思っています。



思い出

安田 勝
(昭和39年卒)

昭和40年4月から同50年5月まで在籍し、樋口謙太郎教授の定年前の医局長、占部治邦教授の2期目の医局長をした。在学中に肥前屋旅館で歓待されたことや樋口教授に憧れて、大学院学生として入局した。ところが1年後には、お前は老けて見えるし、独身だしということで県立宮崎病院に出され孤軍奮闘する羽目になった。この間、色々なエピソードがあるが、なかでも某野球選手の治療医となり記者会見し、スポーツ新聞の一面を大きく飾ったことがあった。また、泉谷武近院長が夜間に足元を懐中電灯で照らし診察に行く姿に強く感銘を受けた。

昭和43年金沢市における第12回日本医真菌学会

總會（福代良一会長）で樋口教授は「足白癬の局所因子の検討」を宿題報告された。その報告を基礎に小生の博士論文（足部白癬の発症に関係する生体側局所因子の研究）を、西日本皮膚科（昭和44年12月発行）に発表した。この論文の審査が医学部ストと重なりストップした。医局解体、講座制廃止、博士号ボイコットの最中であったので、周囲より冷たい目で見られた。その後、機動隊の導入により医学部の封鎖が解除され、主査は樋口教授、副査は武谷健二教授、百瀬俊郎教授で論文が審査され、無事に博士号を取得することが出来た。この論文の作成には西尾一方先生、幸田弘先生の協力が大であった。

樋口教授は麻雀が好きで、時々お伴させていただいた。先生は大きな役やタンヤオ三色がお好きのようであった。小生が安くアガるので、安アガリの安と言われたこともある。先生は、福大医学部の創設のために多忙な毎日を送られていた。ロータリアンであることや先生の人望を考えると、参議院にでも立候補されるのではないかと思われた。代議士は男冥利に尽きると、小生に言われたのが印象的である。先生の退官後、小生が医局長御苦労様でしたとのことで自宅に招待され、奥様の得意なタケノコ料理を満喫した。樋口教授の後任教授選考委員になり、同門の6人が候補者になった。他大学からの応募はなかった。

昭和46年7月より、占部治邦教授になって先生と一緒に手術する機会が多くなった。先生は手術の出来る皮膚科医の育成に力を入れられた。後に先生の勧めで東京労災病院の倉田喜一郎部長の下に国内留学し、倉田先生に色々とお世話になった。

昭和47年5月、映画「ベニスに死す」の舞台となったリード島の国際皮膚科学会に出席した。中溝慶生教授も一緒であった。旅行中、日本赤軍によるテルアビブのロッド空港乱射事件があり、帰路が南回りであったため、無事に日本に帰れるか心配した。まだ、昨日のこのように思い出される。

最後に同門の皆様の御活躍を祈念致します。



昭和40年代の思い出

末永 義則
(昭和40年卒)

九大皮膚科学教室100周年記念誌への原稿のネタになるものはないかと本棚の隅の古い本を調べていると、出てきたのは色褪せた昭和41年の自遠会・地方会会員名簿でした。パラパラとめくってみると、懐かしい諸先輩の名前が次々と目に付きました。既に他界された方々の名前も見受けられます。昭和41年は、私の入局した年で、当時の自遠会は泌尿器科教室と一緒に、名簿の名前も一緒に載っています。皮膚科教室員の一覧表には、樋口謙太郎教授を最上段に、以下順番に並び、一番最後の最下段に大学院生の私の名前が書かれていました。

昭和40年代の医学部の学園紛争はインターン制度反対運動で幕が開きました。私達40年卒は学外インターン拒否ということで、同級生のほとんどが九大病院でインターン生としての1年を過ごしました。その後の学園紛争は、医局講座制、無給医制度などへの反対運動へと発展、おまけに九大では昭和43年のファントムジェット機墜落事件が起こった為、板付基地撤去運動も加わり、学内は一段と騒然となり、昭和44年には医学部学生がストライキに突入するという事態に至りました。

さて、私は昭和41年に皮膚科学教室に入局と同時に大学院に進学しましたが、在学中の4年間のうち、昭和41年9月からのほぼ2年近くは山口赤十字病院への出張で過ごしました。出張当時の3ヶ月ばかりは部長の中溝慶生先生と一緒にでしたが、先生が温研に転出されてからの1年余はたった1人で、九大泌尿器科からの応援を得ながら、なんとか無事に過ごすことが出来ました。

昭和43年の春に帰学しましたが、学園紛争の真っ只中であり、教室内でも度々、医局会が開かれ話し合いがもたれていました。昼間の皮膚科の勤務を終え、夜になって法医学教室に行き、1年先輩の小嶋亨先生の指導を受けながら、グリセオ

フルビンの血中濃度の測定などの研究を細々と行っていました。昭和45年には論文にまとめることができ、秋に論文審査となりました。学園紛争の最中であり、審査は非公開で場所は皮膚科学教授室、審査員は主査が樋口教授、副査が公衆衛生学の倉垣匡徳教授のお二人のみで行われました。大変ありがたいことには、簡単な主旨説明と質疑応答で、後はいささかの雑談ですみ、翌昭和46年2月に無事学位をいただくことが出来ました。同年3月の樋口教授の御退官、7月の占部治邦教授の御就任という教室の変革の時期を経て、昭和51年6月に教室を去り、今日に至っております。

九大皮膚科学教室の100年という長い歴史の中の一員であったことを、心から誇りに思っています。また、これからの教室の益々の発展を祈っております。

九州大学皮膚科医局と私

金出 明子
(昭和43年卒)

九大皮膚科医局における研鑽の日々を、今も懐かしく思い出す。

昭和43年4月、大学紛争の直前、樋口謙太郎教授のもとに入局した。正門から入って左手の趣のある古い木造の建物に研究室と医局があった。利谷昭治助教授(当時)をはじめ、個性豊かな先生方に学問のみならず、多くのことをご指導頂いた。五島応安先生、都外川幸雄先生、北村公一先生方が楽しそうに研究や診療に興じておられた。当時は、ライター制度というものがあり、私のライターは中垣謙一先生だったので、先生の後にいつもついていた。

昭和45年に渡米し、Case Western Reserve 大学にて腫瘍免疫の研究に従事した。昭和48年、帰国、占部治邦教授主宰の皮膚科医局に戻ることができた。留学中に大学紛争は収まり、医局はすっかり変わって、若返っていた。ここでまた、沢山

の貴重な勉強をすることができた。夕方になると、三々五々、実験、研究の合間に、一息つきに医局に集まって雑談をしたものである。この中で、いろいろな知識を吸収した。西尾一方先生の組織学、幸田弘先生の lymphoma の講義等々。幸田先生の「皮疹を診るときは、常にその組織がどうなっているかを、思い浮かべなさい」という教訓は、その後の私の診療の指針となった。

皮膚科歴20年を経て、行政に転じ、約5年前から、中村学園大学にて教授として公衆衛生学を担当している。この間、皮膚科を離れたわけではなく、事あるごとに、昔取った杵柄で皮膚科と関連したこともしている。現在は、公衆衛生学の他に、少しばかり皮膚科の講義をし、また、皮膚疾患を学生の卒業論文指導のテーマの一つとしている。

九大皮膚科医局は私の心の故郷の一つである。益々の発展を祈念して止まない。

私の医局時代

福田 英三
(昭和44年卒)

昭和48年九大皮膚科に入局。一年後、福大皮膚科に行くことになり、占部治邦先生からは「福大が居心地良かったら、帰ってこなくてもいいよ」と言われての出向でした。福大赴任時は樋口謙太郎先生、利谷昭治先生と私の3人で、いろいろ忙しいこともありましたが、中洲にもよく連れていってもらいました。樋口謙太郎先生は甘いものもお好きで、リヤカーの焼き芋屋さんが「い～しやあ～きいもお～～」と言って店の前を通ると、ちょっとドスの効いた声で「おい、焼き芋を買って来い」リヤカーを追っかけて新聞紙に包んだ熱々の焼き芋を買ってきたことを懐かしく思い出します。私にとってはこんなことは当たり前のことでしたが、九大では福田は年寄り?の面倒をよくみていると評価?され、その功績?で一年後、九大に戻ってくることになりました。

九大では特に木曜日のカンファレンスの後にご馳走がふるまわれることが多く、中洲に繰り出すこともありました。しかし、この飲み会で皮膚科学について多くのことを教えてもらい、私の皮膚科学の知識はこの耳学問があつてのことと今では感謝しております。

また、麻雀もよくやりました。今でも、そのメンバーとは時々、雀卓を囲むことがあります。しかしこのメンバーはかなりの酒豪で、今でも麻雀しながら生ビールを中ジョッキで数杯以上飲んで、ぐでんぐでんに酔っ払っているように見えるのですが、なかなかチョンボしません。そのしたたかさにはいつも感心させられます。

このように医局時代は中洲・酒・麻雀に明け暮れた毎日でしたが、流石の私もこんなことを毎日続けていたら、体を壊すんじゃないかと不安になり、そろそろ潮時と考え昭和53年に開業しました。

開業後は、診療所の火事、診療所の新築、その後の水害と相変わらずの波瀾万丈の人生ですが、めげずに頑張っております。

医局の良さは医局を辞めて初めてわかるもので、本当に楽しい医局時代を過ごさせていただき、改めて九大皮膚科に感謝いたします。

皮膚科自遠会へ感謝

中尾 偕主

(昭和44年卒)

さて、今を去る36年前の昭和44年春、慈恵医大を卒業し、紛れもなく念願の九大病院での研修が始まりました。この頃は、全国あまねく、大学紛争の波に揺れ動いた時代で、九大もその渦中にありました。今では考えられない事ですが、他大学卒者が九大病院での研修を受けるにあたっては、闘争の旗頭・青医連の許可が必要でした。ベトナム反戦や研修医の有給化、無給医局員の廃止等々卒業した大学が、同様の反対闘争をしているかが条件で、闘争へのスタンス、ポリシーを、古ぼけ

た事務局で査問され、正直暗澹たる思いをした事を、懐かしく思い出します。大学での研修は泌尿器科でしたが、医局先輩との交友関係にも恵まれ充実したものでした。その後、国立福岡病院、広島日赤病院、九州厚生年金病院で研さんを積んだのもつかの間。昭和48年に、敬愛する皮膚科開業医・父泰三の死で佐賀に戻り、跡を継ぎました。父は、故樋口謙太郎名誉教授から研究生として指導を受け、週2回九大皮膚科の研究室に通い、また診療所に実験用のうさぎ小屋まで作り、無事博士論文をまとめております。樋口先生がご退官後も占部治邦名誉教授から同門としてご厚情を賜り、そのご縁で教室に在籍がなかった私にも自遠会員の資格が与えられたものと承知しております。そして、佐賀医大が開校となり、皮膚科学教授に幸田 弘先生が赴任されてからは、診療、手術等に援助を受け、退官後も三砂講師に一方ならず助力を頂いています。これもまた自遠会会員であるための幸田先生から賜った御配慮と感謝しています。唐突な話で恐縮ですが、占部治邦先生、熊沢浄一先生が主催される福岡・佐賀 STD 研究会が20年前に始まりました。クラミジア感染症が話題になりはじめた頃で、縁あって佐賀医大微生物学教室永山先生の所で勉強することになりました。培養細胞は未定、培養液組成の研究も始まったばかりでした。やっと実験系がきまり、標準株や臨床株での薬剤感受性試験、封入体、基本小体の培養細胞内での薬剤の影響等を電子顕微鏡で動向を見ておりました。雑誌の投稿、学会での発表の機会もあり、そこでこの際、こともあろうに、九州大の博士論文執筆をと目論みました。が、その結果は見事資格試験は合格しましたが、諸般の事情もあり残念ながら挫折、今は40歳代のよき思い出となっています。近時は、佐賀大学皮膚科の抄読会・症例検討会に出席させて頂き、その傍ら、郡市医師会の仕事や佐賀県社会保険診療報酬支払い基金審査会の末席を汚しております。

古江増隆教授に自遠会の退会をお願いした事もありますが、おもえば開業以来、占部治邦名誉教授はじめ自遠会による有形無形の恩恵は筆舌に尽くし難く、ただ感謝あるのみです。そして、記念

誌寄稿の機会まで頂き、古江増隆教授はじめ同門の先生方に衷心よりお礼を申し上げ、九州大学史に燦然と輝く皮膚科教室の、ますますの発展を祈念します。



再 会

和田 秀敏

(昭和46年卒)

平成11年春、福岡シーホークホテルで開催された第42回日本形成外科学会の評議員懇親会で偶然にも札幌のA君、徳島のN君に同時に会うことができ、十数年ぶりの三人揃った再会に人目もはばからず手を取り合って喜んだ。A君は札幌を離れ、旭川の病院で形成外科の部長として、またN君は母校に新設された形成外科の教授に就任し、そして私は開業と各々別の道を歩んでいる。

今から二十数年前、ディズニーランドに程近いホテルで開催された日本形成外科学会の懇親会の後、お互い歳が近く同じく大学の皮膚科教室で形成外科を診療している三人が意気投合し二次会に繰り出した。とある小さなバーで夜を徹して形成外科の未来を話し合ったことが昨日のように思い出される。今思い返せば青臭い議論であったが、自分の所属する皮膚科教室から是非とも形成外科を独立させるべく勝手な意見を戦わせた。当時、診療科として形成外科の必要性が声高に叫ばれていたにもかかわらず、関東や関西を除き医科大学に独立した形成外科教室はほとんど無く、その夢はおのずから広がった。その後、三人は学会で会うたびにお互いの夢を語り合い、夢の実現を誓い合った。

それから十数年、A君は思惑とは裏腹に札幌を離れ、病院の形成外科部長となった。皮肉なことにA君が教室を離れた後、形成外科教室設立が認められ、公募により学外から新任の教授を迎えている。N君は幸運にも所属する皮膚科教室の教授が学長となられ、学長との二人三脚により形成外

科教室が新設され、初代教授に選任された。

残りの私は夢の実現を他大学移籍に求めたがうまくいかず、A君、N君にはもう少し大学で頑張るよう励まされたが、失意のもと開業の道を選んだ。

開業して早くも14年、今は殆ど忘れかけている懐かしい思い出だが、開業を決心した時にお世話になったK医大の形成外科教授T先生のところへ挨拶に行くと、「君も馬鹿だなあ、旧帝大は色々としがらみが多く、おまけによそから入局した者がいくら頑張ってもどうしようもないことは分かっていただろう」と、言下に諭された。確かにそれは分かっているが、それまでお互いに励ましあいながら果たせぬ夢を持ち続けたことが自分自身の青春と思わざるを得ない。

九州大学皮膚科教室も開講100年を迎えた。これまできらびやかな優秀な人材を数多く輩出していることは周知のことであろう。しかし今日、教室出身者の他大学での活躍の場はほとんどなくなってしまった。手前味噌な話に終始したが、今の若い医局員にこれからの皮膚科学会を支えていくという心意気があるか否か、老婆心ながら心配である。



医局時代の思い出

川野 正子

(昭和47年卒)

入局当時正門を入ってすぐ左に曲がった所に、木造の古いながらも趣ある建物が残っていて床も木でした。(中に入ればボロボロでしたが) 離れに医員部屋 [小屋] があり、天井は高く広々して自由感がありましたが3年後は取り壊しの運命でした。一年上に綱脇ヒロ子先生がおられて、いろいろ教えていただきました。胃スキルス癌で28歳でお亡くなりになり、今年もう33回忌だと思えます。事実は小説より奇なりといいますが、ご主人の後を追って短い人生を終わられました。

当時、真菌研究が盛んで冷暖房設備など無い研究室で、オートクレーブを使ってサブロー培地を作る際は蒸し風呂状態で、夏の本房先生の上半身裸で頑張っている姿が思い出されます。1階にありましたから窓の外は草の生えた土で、排水設備など整備されていませんでしたので、どれだけの菌が土壌に帰ったのでしょうか。

病棟は新館でした。今はこれも建て代わったのですから隔世の感があります。外来と病棟勤務は3ヶ月交代でした。病棟は皮膚科専属看護婦さんなので、ドクターは指示を出せば付け替えなどもしてくれました。当直以外、日曜出勤はなくいい時代でした。病棟医長は旭先生でした。治療は主治医に殆んど任せてもらえました。日曜日は時に山に登ったりしました。昼休みに、中洲まで焼肉を食べに行ったりしました。

書類書き等、殆んど無く時間的余裕のあった時代です。唯一、書類といえば、病棟の診断書本に、下敷きを忘れてよりによって男性の患者さんのペニスの絵を書いて場所を示した事がありました。2枚綴りのノーカーボン紙で下手な絵が何十枚かの診断書に写った時は、魂消しました。恥ずかしいやら何と言ってよいか分からない思いをしましたが、当時の旭先生はじめ同僚は冷やかしくもなく、お咎めもありませんでした。何枚か使えずにいつも其れが在って診断書本を開くのがイヤでした。私の画歴の第一号でした。それがきっかけになったかどうか、それから10年以上経って、日本画を習い始め今に至っています。当時、私が絵を描けるようになるとは誰も思っていなかったと思います。私自身も。

当時、保険本人は医療費負担はただでした。保険財政のことなんか考えずに治療していました。高度成長期で、給与は医局事務員の半分くらいで気の毒がられる程安かったのですが学会にしても会食にしても手出しは無く、いい時代だったと思います。



試練に感謝

上田 説子
(昭和47年卒)

医局時代は私の人生で二度と繰り返したくない最もハードな時期でした。

料理も洗濯も一度もしたことのない私は生まれ育った熊本を離れて、全く誰も知らない土地、福岡で新婚生活をおくることになりました。「女性が職業をもつことは素晴らしいことだ」という夫の言葉に力づけられて、仕事への決意と期待を胸に九大に入局しました。

しかし、現実日は日を追う毎に本当に厳しいものとなりました。時間的な拘束は予想していたのですが、仕事から帰宅すると朝の食事の後かたづけ。そして夕食を作り、食べるのは11時半。その後に洗濯を取り込み、また、洗濯を干して。日中に自宅にいないので洗濯物は湿気を帯びているので毎日アイロン。ほっと一息つくのは1時過ぎです。子どもが生まれてからはもっとハードになりました。子どもを迎えに行くのが夜10時すぎ。お風呂に入れて、寝かせて自分たちの夕食を作ります。保育園や預かってもらっているお宅では布おむつを使用していたので、帰宅時には全て持って帰り洗濯も大量になります。ほ乳瓶も次の日の分まで消毒し、一回分ずつのミルクを入れて…。少し大きくなったらお弁当作りです。朝はいつも5時起床。3時間睡眠でした。

家では仕事はしないと決めていたので、大学にいる間に臨床・研究と勉強しなければなりません。それが出来ない自分に非常に苛立つのですが、「自分が出来ることを一生懸命やればいい」「自分を甘やかすことだけはしたくない」と思い続けていました。占部教授、利谷教授(当時福大)、故西尾教授、幸田助教授(当時)はもちろんのこと、とりわけ研究面でずっとサポートして頂いた旭講師(当時)の暖かい愛情ある御指導のおかげで、医師として厳しく生きていく姿勢を学びました。本当に感謝致しております。

子育てでも大きな経験をしました。長男は当時治療法のなかった「太田母斑」。医師としてあざを持つ人の気持ちが殆ど分かっていなかった事に気づきました。長女は5ヶ月で「點頭てんかん」が発症。「頭の中が真っ白になる」という事を経験し、小児科病棟で白血病の子供のお母さん方の力強い生き方に感動しました。発見が早かったこともあり、九大では2例目として、普通小学校に入学出来ました。この娘も古江教授のおかげで念願だったアメリカでの研究生生活をさせて頂きました。こうして辛かった日々も今となっては素晴らしい思い出です。

女性が医師として生きていく事は大変な事です。私の場合、それは自分に与えられた大きな試練でしたが、同時に神さまが私に与えてくださった大きな愛情だったとも思います。あの二度と繰り返したくない24才から31才までの時代を自分なりに弱音を吐かずにクリア出来たことが私の中では大きな自信になりました。開業してからも多くの困難に直面しましたが、それを乗り越えられたのも医局時代に得た頑張れる力のお陰だと思えます。

「試練に感謝」というのが今の私の心境です。



日野由和夫
(昭和47年卒)

昭和47年入局です。学生紛争もようやく収まりつつある時期でしたが、3、4年生の頃、臨床講義は不規則で、すみませんほとんど記憶にありません。ノンボリのいい加減な学生でした。入局させて頂いていただけることになり、慌てて樋口先生の教科書を調達しました。どうして皮膚科を選んだのか。入局の動機は書けるようなものではありません。

正門に入って左手に皮膚科学教室の立派な玄関があります。学生時代より、浜松町、箱崎あたりに住んでいたため、もっぱら裏門から出入りし、

うまくいけば偉い人に会わずに一日過ごすことも可能でした。教授室をはじめ、図書室など古色蒼然とした二階に行くのは、給料日に医局長室の立て付けの極めて悪い引き戸をおそろおそろ開ける時くらいでしょうか。そのうち、医局で酒を飲むことをおぼえて、占部教授、幸田助教授、西尾講師はじめ、福岡、北九州の諸先輩方に大変お世話になり、どうにか皮膚科医になれたでしょうか。有難うございました。

写真を眺めていますと、裏口からコソコソではなく、毎日正門を通过这个の玄関から出入りしていれば、もう少しまともな皮膚科医になっていたかもしれないという気がします。

L 研

本房 昭三
(昭和48年卒)

私は昭和48年の入局である。当時の皮膚科教室は医学部正門を入れて左側すぐのところにあった二階建ての木造の建物で、泌尿器科教室との共用であった。この机を使用しなさいと指示された部屋は、L研と標示された、建物一階ほぼ中央部にあり、渡り廊下からぼつんとひとつ、あたかも憩室のごとくに入り込んだところにあった部屋で、すでに泌尿器科の先生がその半分を一人で占めておられた。皮膚科も使用する権利があると言われ(使用権を主張するために送り込まれたのかもしれない)、石坂先生と私の二名の新人が泌尿器科の先生の向かい側に二つ机を並べてすわらせられた。まだ医師国家試験の合否待ちの状態、午前中は外来で研修のまねごとをして過ごしたが、午後は何をしてもよいのかわからず、L研の机に座って漫然と時間の過ぎるのを待つという日々を過ごした。隣席の石坂先生はすぐに居づらい雰囲気を感じたのか、午後は研修二年目および医員の先生方が机を並べる、かなり離れたところにあった部屋で時間を過ごしておられたが、私は人見知り

する性格であったため、他の先生方と会話をかわすこともなく、ひたすら部屋の中で、上の先生からの指示を待ちわびるという毎日であった。しかしながら、一週間、十日経ってもL研に出入りする人間は部屋に机をもつ三名のみで、いずれ臨床・研究面に関する指導があるに違いないとの期待感はいつの間にか泡と消え、これからどうなるのか、このままこの部屋で誰にも相手にされず朽ち果てていくのかという不安感、焦燥感で胸の中はいっぱいとなった。このままではいけないと考え、当時医局長で、一見こわもてで知られていた安田先生に「何でもしますので、先生の仕事を手伝わしてください」と直訴したのは二十日ほどたってからのことであった。その時は、「今の若い連中は口先だけはうまく、実際は働かないのが多いが、君もそうじゃないのか」と言われ、必死に「出来ることは何でもやります」と訴えたのを今でも強く記憶している。その後、私は安田先生のあとを金魚の糞のごとくくっついてまわるようになり、一ヶ月ほどのちにはひまな時は医局長室のソファで大きな顔でくつろぐまでになった(無論この間、夜も遅くまで汗だくでマウスの動物実験に多大な時間を費やすという代償は払うことになったが)。また安田先生のみならず、医局長室に出入りする多くの先輩の先生方にも可愛がってもらえるようになった。その後、二年足らずのうちに臨床研究棟が完成し、私のL研での生活も終わりを告げることとなったが、今では懐かしい思い出となっている



山脇 均
(昭和48年卒)

占部教授在任中に入局しました。当時は、まだ慢性的な医師不足でしたが、将来を考えての事でしょうか、医局員を積極的に大学院、あるいは海外留学に送り、後進の育成に努めておられました。

その結果、現在ではそれぞれの分野で、指導的な役割を果たしておられます。当時の研究分野としては、真菌症を中心に病理、電顕、形成外科、ウイルス、免疫などがあり、また果敢に新分野にも取り組んでおられました。医局の先生方は皆、夜遅くまで臨床研究に頑張っておられ、常に先端医療を目指し、一歩も二歩も先を歩いておられました。また、昭和55年の第24回日本医真菌学会、昭和56年、九大皮膚科75年間の統計は、教室のみんなが一丸となって立派に目的を達成されました。今では、懐かしく思い出します。

早いもので、もうあれから25年経つのでしょうか。今回、開講100周年を迎えますが、九州大学医学部皮膚科学教室が益々の発展、また国際的な業績を残されると期待しております。私事ですが、わずかな期間でしたが九大皮膚科に在籍し、学んだ事を誇りに思います。今後ともよろしく願います。



中山樹一郎
(昭和50年卒)

私は昭和50年に入局しました。その年は新入局者が多く、歓迎されました。入局の動機は学生時代あまりにも不勉強だったので、なんとか目立たなくてすむ科に入ろうと考えたことでした。実際、皮膚科の医局員は当時少なく、その事は当たっていたのですが、人数が少ないため一人一人が逆に大変目立つ、という誤算がありました。真剣に内科が良かったか、と悩んだこともあります。そのうち、不勉強のままでは常に足元をみられておどおどした人生を送ることになるのでは、と考えるようになりました。そこで、色々あったのですが、谷へでも飛び降りるつもりで、大学院に進学しました。当時の占部治邦教授が良く私に許可を与えられたなー、と時々なつかしく思い出します。その後、大学院の4年の時NIHのDr. Yuspaの

laboratory に留学希望の手紙を出し、運よく許されてそこで2年半ほど皮膚癌の勉強をしました。NIH では現筑波大の大塚藤男先生、山梨大の島田真路先生、名古屋大の富田靖先生、昭和大の飯島正文先生などと知り合い、その事が私の人生の大きな転機となった気がします。帰国後は医局で私より若い先生方と一緒に実験を行いました。当時の研究仲間の皆さんはそれぞれに立派な皮膚科医に成長し活躍しています。ふと気づくと、医局には堀嘉昭教授以外私より年長者がいなくなっており、堀教授から助教授を拝命しました。学生時代の事を考えると信じられない事でした。平成10年には古江増隆教授のご推薦で福岡大学の皮膚科教授に選ばれました。現在教授に就任して7年目になります。これまでの私の事を考えると、とにかく人に助けられたという思いしかありません。少しでも恩返ししたいと思っていますが、日暮れて道遠しです。私も56歳になりました。いつまで元気に仕事ができるかわかりませんが、皆さんに迷惑をかけないように精一杯頑張るつもりです。



編集と私

武石 正昭

(昭和50年卒)

昭和51年、2年目の研修医として九大に戻った私は、すぐに「西日本皮膚科」の編集委員に抜擢(?)されました。松本長期政権の後を承けた日野新編集長の人選です。単に消去法によるものだったと思いますが、その時から私と編集との関わりが始まりました。印象に残っていることを綴ってみます。

(1) 給料日…皮膚科の図書室の一角のウナギの寝床のような編集室に、日野先生、私、編集助手の松尾さんが並んで座っていました。当時大学院生の日野編集長は給料日を失念されることもあり、そんな折、窓から遠くの空を眺める松尾さんの憂いを含んだ横顔は、小津安

二郎の映画の一シーンのようでした。

- (2) 75周年記念号…編集長に就任早々、九大皮膚科75周年記念号の発行という大仕事を命じられました。隔月の西日本皮膚科の間に特別号として記念号（ボリュームは優に2冊分）を挟み、通常号と通しページを付けて発行するのです。医局員に手分けして校正してもらいましたが、ほとんど役に立ちませんでした。予定通りに発行できたのは、奇跡としか言いようがありません。
- (3) 宇都宮徳馬氏…昭和57年4月、料亭老松で宇都宮徳馬氏を囲む座談会が開催されました。政治家としてご活躍中でしたが、薬の行商をした頃の話、ミノファージェンCの開発に纏る話など、興味深い話が伺えました。芸者の三味線に合わせて小唄を披露され、お座敷芸に長じているところも見せていただきました。私が写真を撮ったりしていると、雑誌社の記者か何かと間違われたらしく、「あなた、何歳？」と聞かれました。「33歳です。」と答えますと、「30台前半か。いいね。やりたい放題だね。」と言われました。何をやりたい放題なのか、未だに確とは分かりません。
- (4) 日皮総会新聞…平成6年に堀会頭の下、福岡で第93回日皮総会が開催されました。当時は、福岡日赤に奉職していましたが、堀先生のご依頼で、総会初日に「日皮総会ニュース」を発行することになりました。総会前日に福岡ドームで行われた支部対抗野球大会の結果などの原稿を夕方受け取り、当時珍しいカラーレーザープリンターがあった上田説子クリニックへ急行しました。マッキントッシュで編集し、400部を刷り上げたのは、総会初日の朝4時頃だったと思います。深夜の無人のクリニックで、トナーや紙の保管場所もわからず、とにかく綱渡りの作業でした。会場入口で配布した新聞は幸いにも好評で、堀先生にとっても喜んでいただきました。
- (5) 自遠会誌…占部会長のご指示で、平成11年に皮膚科自遠会誌の第1号を、平成13年に第2号を作りましたが、初めてのことで全てが手

探りの状態でした。質素に作ろうという計画で、毎日少しずつ自宅のマッキントッシュに原稿を打ち込み、プリントしたものを日赤の隣の印刷所に写真製版させました。第1号はとにかく発刊することが目的でしたが、第2号では方向性も定められたと思います。



私と皮膚科

深松 建史
(昭和50年卒)

どうしようもない留年生の私の骨を、拾って下さったのが当時の教授占部先生でした。その当時の医局長は、武石先生で口数の少ない優しい先生でした。

カバンを医局長室に置き、外来、そして午後からは病棟への毎日の繰り返しでした。

当時の病棟医長は今山先生でした。言葉少なに、貴重な症例を教えてくださいました。第一日目は、刺青の線掘りを、メスにて取り除くの見学させて頂きました。執刀は入局間もない武下先生と井上光世先生でした。

私は病棟でコーヒー入れに頑張っていました。一番恐かったのは、カンファランスでした。特に問診のとり方が一番嫌でした。

今現在があるのは多くの先生方、特に占部先生のお陰と深く感謝致しております。島原においての時は、是非お声をおかけ下さい。

雑文で申し訳ありません。



九大皮膚科医局と私

大野 宏守
(昭和50年卒)

九大歯学部専門課程中退後、熊大医学部へ入学し、卒後医師となり九大で最初に巡り会ったのは中溝慶生教授であった。九大温研に入り、机上でしか医学、医師のあり方もわからず、右往左往の毎日だった。夜は医局長命令で町の第2医局に出務し、医局漬けの日々であった。ある日曜日、一人で医局に居る時に中溝教授が来られ、医局で教授とビールを交わしながら、テレビで大分マラソンを観ていた。ラストスパートシーンで教授は2位の人が必ず追い抜いて優勝すると言われ、不思議に思っていたが、教授の予言は的中していた。

入局して一年が終わろうとしていた頃、教授に馬出の医局に行くように指示された。私はProf.のご判断で僕の勉強になると思われたなら、何処へでも行きますと答えた。中溝教授には勘の良さ、厳しさの中に人間らしい優しさの薫陶を受けた。

次に、九大医局に入局し占部治邦教授にめぐり会った。医局の人数の多さ、層の厚さに驚き、ここで自分は潰されるのではないかと危機感を持った。さりとて帰る所もなく仕方なく頑張っていた。1年後、占部教授に医療技術短大生化学教室で皮膚化学発癌実験を指示され、診療しながら動物実験の二足の草鞋を履く医局生活が始まった。ある日、担当の術後患者の回復に時間がかかり、約束のマウス健康チェックに数時間遅れた。基礎教室で「君は患者の命とマウスの命と、どちらが大事か」と聞かれ、「人の命です。」と答えたら「出て行け!!」と怒鳴られた。基礎実験の重さと厳しさを痛感させられた。また、実験進行の途中で、急に広島日赤病院へ出張命令が下った。仕方なく、毎週土曜午後～日曜深夜まで九大に帰り、広島一博多の往復生活が始まった。広島日赤病院の弘中哲也病院長が見兼ねて、マウスを日赤の倉庫で飼育し、動物実験をしてもよいと温かい言葉を頂き、胸にじーんと沁み有難かった。間もなく九大

に帰還の許しが得られ、胸をなでおろした。帰局後、入院患者6～8名を持ち、実験を行う生活が続いたが、中々ペーパーは書けず、つくづく二足の草鞋の辛さに苦しめられた。

医局を離れ2年後、やっとペーパーを書き上げ、占部教授の許しを得て、学位論文審査の壇に立たせてもらった。審査合格後、拙院の開院準備に忙殺され、清書したペーパーの提出が遅れた。占部教授より松山へじきじきに論文提出のお電話を頂いた。他校出身の私を占部教授は見捨てていなかったと感銘し、御蔭で心残りなく開業の人生が歩めた。

大学変革、医局制度の廃止が叫ばれ、善し悪しはその中身である。医局では数名の良き学兄にめぐり会えた。更に、私にとって中溝教授、占部教授は皮膚科学の師である以上に、親にも等しく人生の道しるべを教わった恩人であります。両教授には幾久しく門下生達、および九大皮膚科を高所より見守って頂きたいと願うものであります。



忘れられない日

桐生 博愛
(昭和51年卒)

人には誰でも一生涯忘れられない日があるものですが、私のその1つが25年以上前の昭和54年4月2日、産業医科大学の第一回職員採用辞令交付式の日です。その日は真新しい大学の校内に桜が満開で真っ青な空に映えていました。

当時は、新設大学が全国に開講し一気に医科大学が増えた時期ですが、北九州にも産業医科大学が当時の労働省の管轄下で開講し、九大皮膚科からは西尾一方講師が産業医科大学皮膚科教授として就任され、学生部長として活躍されていました。しかし、外来診療も付属病院もまだ始まっておらず、7月予定の付属病院開院の為に第一次職員として各科医師約100名、看護婦約250名の採用があり、その辞令交付式に私も参列しました。式の後、

全員で記念写真をラマチーニホール前広場で撮り、その写真は後で戴いた記念アルバムの1ページを飾っていました。

そして、次の日からは福岡からの通勤が始まりましたが、大学棟の4階の産業医大皮膚科の医局には何も有りませんでした。医局員は他には誰も見あたらず、私が第1号とのこと。部屋は机椅子以外には何もなく、正に医局はただの箱状態でした。ノート鉛筆さえなく、請求書類を大学事務係に提出して後日届くの待つ始末。書類には必要理由、銘柄、個数などなど、ばかばかしくなるほど記入しました。何でもある九大医局とのあまりの違いに戸惑うばかりでした。九大を辞して産業医科大学に行くことになり、九大医局にいる間に新しい医局に役立つような情報を集めようと、医局の物品や備品、実験室の配置や機械器具、更には電源位置やワット数などメモに書き留め頭にたたき込み、来たるべき日に備えていましたが、それが役に立つのはずっと後になってからでした。

それから暫くは何もすることがないひとりぼっちの毎日が続きましたが、やがて実験室の機械が次々と運び込まれる様になり、機械の荷ほどきと据え付け、いかなる機械かを理解するための説明書の解読が日課になりました。荷解きをやっていると、重要部品が別購入になっていたりと納入業者のしたたかさが見えたりすることもありました。そして、この状態が延々と開院の7月まで続く事になります。

今現在、北九州の皮膚科医会で活躍されている産業医大と縁のある先生を挙げればきりがありませんし、昨年はかつて医局員であった山元修先生が鳥取大学皮膚科教授に就任されており、これらの始まりがあの日からと思うと感慨深いものがあり、私にとって一生涯忘れられない日であり出来事です。



医局の思い出

西村 正幸
(昭和51年卒)

私が在局した昭和50年代の前半は、占部教授を頂点に幸田助教授、西尾講師、旭講師といずれもその後他大学で教授を務められることになる壮々たるメンバーが揃っていた。毎週木曜日の午後、病理組織検討会が開かれ、それが終了すると医局で酒盛りがはじまり、延々と続いた。酒の飲めない私にとって大変な時間ではあったが、色々たぬ話になる話を先輩の医局の先生方より拝聴させてもらった。医局の思い出は、色々あるが、一つあげるとすると、とある木曜日の酒盛りの席で、幸田助教授がバリ島で開催される国際学会で口演されることになり、成り行きで私も占部教授より幸田助教授の鞆持ちとして同行することを許されたことである。占部教授と快く送り出してくれた医局の皆様に感謝しつつ、勇んで出かけたのは良かったが、問題は帰国後に起こった。

海外出張の場合、その内容を確認するために、帰国後直ちにパスポートの提出を求められる。日本とインドネシアの出入国印があらかじめ申請したとおりに押されているパスポートを提出したところ、その前のページに数ヶ月前大学の許可なく香港に行った出入国記録に係りの事務官の目にとまり、無届の海外渡航として問題視され、占部教授が監督不行届きのおとがめを受けられたことを医局長より聞かされ、息をのんだ。医局の皆は、これで西村は何処へ飛ばされてもおかしくないと、この成り行きを息を潜めて見守ったが、ついこのことについて何の御沙汰もなかった。大学の規則を破った罪の意識よりも、自分の不手際で尊敬してやまない恩師にとんでもない迷惑をかけてしまったことを今でも時々思い出し、ほろ苦い思いが込み上げる。それと同時に、何もおっしゃらなかった占部教授の温情に改めて敬愛の念を深くしている。医局を離れて久しく、大分県の田舎で開業医として、地域医療に取り組んでいるが、各

地で活躍されている同門の先生方と医師の派遣などを通じて今でもサポートしていただいている教室の存在は、私の大きな精神的支えになっている。

私の医師としての原点で、まさに母なる教室である九州大学皮膚科教室が創立100周年の節目を迎えたことを心から祝いたい。社会のシステムが大きく変貌しつつあるがために、先が見通せない困難な時代ではあるが、教室の皆様の卓越した英知と行動力で、困難を乗り越え、次の100年、教室が更に大きく発展することを同門の一人として祈っている。

教授への紹介状

桐生 美磨
(昭和53年卒)

小生は教授3代（占部治邦先生、堀嘉昭先生、古江増隆先生）にお世話になった医局員の一人であるが、在局時、それぞれの先生とさまざまな思い出がある。その中で、奇妙な縁で変わった経験をできたことがあり、その話をたまに酒の肴にしている。

小生が大学院を修了し、佐賀県立病院好生館でのお勤めも終え、当時の占部教授のお許しを得てアメリカ留学が決まったのが1986年。翌年4月には冷たい雨の降るニューヨークで留学生活が始まった。ニューヨーク大学医療センターの皮膚病理部門主任は、かの Ackerman 教授で、当時鬱病を患っていると言われていたため、果たしてどうなることやらという気持ちで初日を迎えた。登場した本人は体も声も態度も大きく、杞憂も吹っ飛んだ上、圧倒されたというのが本音である。さて、1年の研修を終え、次にハーバード大学マサチューセッツ総合病院皮膚病理の Mihm 教授のもとで勉強したいと言うと、Ackerman は嫌な顔もせず、Mihm と大親友であるということで紹介状を書いてくれた。自身の恩師をはじめ、普段はハーバード学派をさんざんこき下ろしていた

のに、と思いながらもありがたく頂戴し、そのおかげで(?)気分屋と言われていた Mihm も大歓迎してくれた。さて、Ackerman に紹介状を書いてもらった相手がもうひとりある。それは、なんと故堀嘉昭教授である。小生の留学中に、当時の占部教授のご定年で堀先生が赴任されたわけであるが、小生には面識がない。Ackerman に堀先生を知っているか聞いてみると、またまた大親友であるという。実際、マサチューセッツ総合病院での研修時代に堀先生が先輩としておられたとのことであった。そこで、帰国後医局に復帰する時に紹介状を書いてくれることになった訳であるが、自分の主任教授に留学先から紹介状を書いてもらったのは、九大皮膚科では小生ひとりではあるまいかと思う。なんとも奇妙な経験をできたのは、今にしてみればいい思い出である。



研修医時代の思い出

田中 裕幸
(昭和53年卒)

九大皮膚科開講100周年おめでとうございます。私は、昭和53年(1978年)に、桐生先生、八島先生と一緒に入局し、在局したのは1年半だけでしたが、若き医師時代のスタートを福岡の地で楽しく過ごさせていただいたことに感謝しております。長崎大学の学生時代に当時の占部教授に面接していただき、入局後も占部先生のご専門の真菌症の研究室に入れていただきました。日曜も休まず研究される本房先生の後ろ姿に圧倒され、一方、マイペースでお人柄の良い真崎先生と、九大前の喫茶レストランでゲームに興じたことが昨日のように思い出されます。医局対抗の軟式野球大会にも選手として出場し、医局のゴルフ大会では140以上のスコアに悩んだものです。

入局の翌年に結婚し、広島日赤病院に出向、そこでは毎日のように広島球場に、同じフロアで泌尿器科の宮崎先生と一緒に出かけることが懐か

しく思い出されます。そのおかげで、私は今でも大のカープファンです。王選手のホームラン、江夏選手の独特の間合いと投球術などを観察することができました。また、当時の広島球場はカープファン一色で、他球団、特に、巨人の応援をすると拒絶反応。具体的には、声を出して巨人の応援をすると“出て行け”コールが起こり、実際、観客が出て行かれるのには驚いたものです。その年はセ・リーグで優勝し、日本シリーズをウィークデーの昼間に3日続けて観戦しました。短期間ではありましたが、広島での思い出は一生忘れられないことばかりでした。

その後、九大皮膚科から久留米大学第三内科(循環器内科)に転向後、今度は心筋症の研究、そして勤務医を経て、現在は故郷で内科・循環器科・皮膚科の開業医をしております。最近では“女性の高コレステロール血症に治療は不用”という私の持論が、自著や新聞、週刊誌などで有名になったおかげで「性差と医療」(じほう)には毎月エッセイを、Medical Tribune の Circulation Today にも8月から5ヶ月間“臨床医の視点”というテーマで原稿を書いています。中外医学社の「EBM 循環器疾患の治療2006-2007」では、“女性のコレステロールは高めでもよいか?”をテーマに分担執筆しました。9月には、九大二外科出身の松股院長から招かれて中津市民病院で講演。今回の開講記念祝賀会も翌日の東京の研究会で講演する為、欠席します。また、今年4月には、人気番組“おもいっきりテレビ”にも出演、みのもんたさんと話す機会がもてました。

佐賀では、県立病院好生館の武下先生に大変良くしていただいています。性差が大きいはずの皮膚では、美容の面で性差医療が進んでいるかと思いますが、医学的に皮膚の性差をテーマに研究できれば、女性医師の多い皮膚科の今後の発展も大きいかと思います。医局の若手研究者の常識に捉われない研究に期待しています。頑張ってください。

宮岡 達也

(昭和54年卒)

昭和54年に皮膚科に入局したが、同期は永江、今村朋子(旧姓上村)両先生である。翌年に真菌総会が予定されていた為、今も付き合いが続き頭の上がない本房、真崎両先生に入局早々手招きされた後は、真菌グループの末端として、翌年末に総会が終了するまで、総会の準備と真菌の培養、同定や教室保存株の植え継ぎなどを請け合うことになった。

真菌総会が終り、広島日赤病院に出張した時は、弘中院長に可愛がられたが、一度、午後暇な(?)ときに、広島球場に野球観戦に行ったのがばれた時もあまり怒られずにすんだ。婦長さんや他の看護婦、事務の人たちとも楽しく仕事ができ、やや暇をもてあまし、パチンコ三昧の日々であった。

再び九大に戻ってからは、好生館-九大-福大-九大と、出張を繰り返しては大学にUターンしていたが、だんだん腰も落ち着かなくなって、最後は編集長、病棟医長を経験したあと平成元年3月、開業のため退職した。

医局時代、学問的に誇れるものは何もないが、医局対抗野球大会で助っ人なしの試合では、おそらく唯一の勝ち投手ではないだろうか。入局1年目で当時の医局長日野先生、私、畏友八島先生と継投の末、やっと逃げ切った試合で、軟投型の日野先生を打ちあぐんでいた相手に結構打たれたが、今でも、飲み屋では3人で「勝利投手は俺だ」と、いつも言い合っている。また、昔の自遠会は親睦会であり、宴会前にゴルフ大会、マージャン大会があったが、医局員の立場ながら先輩方を差し置いて、どちらも優勝させていただいた。しかし、今やマージャンでは、ビールの飲みすぎでチョンボはするし、帰りには階段から落っこちて顔にけがをするし、ゴルフは、年に数回しかラウンドしなくなったら(飽きた?)100叩きの体たらくである。

医局にいるときは、みんなをよく山にも登った。

アルピニストである前産医大教授旭先生にいつも計画を立てていただき、編集室の磯田、三原、師井先生や、編集員で亡くなられた工藤さんや大熊さん、実験準備室の日野さんを中心に、他の医局員やすでに開業されていた上田先生も参加されたりして、祖母山、宝満山、英彦山、阿蘇山などに登り、ときには迷ったり、雨で登頂を断念したりもした。

結局、出たり入ったりの10年間医局にお世話になったが、悪いことばかりではなかったと思う。

松田 知子

(昭和54年卒)

昭和54年、徳島大学を卒業し、(父が皮膚科医だったので)何となく皮膚科に入局するものと、他の科は考えておりませんでした。が、皮膚科は女は入れない、いらぬということで、解剖教室で実験をしたり、臨床も最初は見学のようなことをしていました。

そのうち発表するならということで、学会には行かせてもらえるようになりました。昭和56年4月、産業医大の開講記念学会の懇親会で今山先生が質問してくださったのが御縁で、同9月より九大にお世話になることになりました。11月に日韓皮膚科学会を控え、猫の手も借りたかったのかも知れません。名札作りからプログラムの発表などの雑用は堀田さんの指揮のもとにこなして、夜は夜で中洲の街に繰り出していたのも今となっては良い思い出です。

翌年3月に突然出向となり、車に乗るだけの当座の荷物を乗せて到着した国立小倉病院は宿舎も古く汚く、外来の床も所々穴に板が打ち付けてあって、地の果てにきたような心細い思いをしました。その時にカンファレンスに来るように声を掛けてくださったのが産業医大初代教授の西尾一方先生で、「九大出の年下の夫をみつけるように」とのお言葉通り(?)、現在の夫と結婚致しました(苦笑)。当時は同じ職場で働くというのは考

えられず、長女が生まれたのを期に開業致しましたが、私のようなものでもそこそこやってこられたのは、医局の諸先輩方や近隣の先生方、義父母のおかげだけでなく、まだ、医者がお医者様と呼ばれたおらかな時代のせいかもしれません。

開業後10年くらいは、子育てもあり、冬眠状態でしたが、最近では西区医師会学術担当理事として、講演会の企画を通して、皮膚科医以外、福岡以外の一流の先生方ともお近づきになれたことは幸せに感じております。また、美容皮膚科の講習会や見学に出かける事も出来るようになり、少しずつ診療にとりいれておりますが、本来の皮膚科をおろそかにしないようにと自分自身を戒めております。

開業して20年を迎えますが、道路拡張の為に立退きとなり、今春、移転することになりました。土地から購入する事となり、新規開業のつもりで気持ちを引き締めていきたいと思っています。

皮膚科医としての私

古江 増隆
(昭和55年卒)

皮膚科医になったのは1980年である。国家試験のマイナー2科目が皮膚科と整形外科だったので、受験勉強しているうちに皮膚科をおもしろいと感じた。そのため、入局科を決めたのは、同級生で一番遅く、4月になってからであった。入局させてほしいと医局長先生に頭を下げたら、肩をポンとたたかれ、野球はできるか、酒は飲めるか、麻雀はできるか、と立て続けに聞かれた。後者の2つは大好きと答えたところ、そうか、これから病棟医長に会いに行けといわれた。病棟医長からはもっと楽しい訓示を受け、目を輝かせていたところ、困ったことに皮膚科は忙しくて休みがない、と言われた。その通りだった。当時の皮膚科医局はどこもそうだったと思うが、熱傷や救急疾患、悪性腫瘍の塊だった。その代わり、実に多くの患

者さんを持たせてもらった。本当に休みはなかった。その分、しばしば飲み連れて行ってもらった。実験は夜中の9時くらいからスタート、寝るのは2時や3時なんてざらだった。残念なのは、その年の入局者3人のうち、1人がすでに他界していることである。

25年間の皮膚科の診療はレーザーや新しい診断技術・新薬などを考えると目覚ましい進歩をとげている。入局当初、イボ外来を手伝った。上手なイボ焼きを教えてもらったし工夫もした。でもどんなに頑張ってもイボ地蔵さんのお力には勝てなかった。そのご利益にすぎりたくて、自遠会のM先生のご許可を得て、宇部のイボ地蔵さんの分家を九大の皮膚科待合室に拝置させていただいた。ご利益があったという評判は未だに聞いていないが、百周年の記念となったイボ地蔵さんの頭は患者さんになでられて光り始めている。

1997年に九大に赴任した。東大とは外来のシステム、医局の構成、関連病院のシステムまで全く異なっていた。今ではすっかりなじんだし楽しい。医局とは実に多くの方が行きかうところだとつくづく思う。8年間に、42人の新入局者があった。新研修医制度のために2004年、05年の入局者はわずかに1名だった。堀嘉昭前教授のご逝去は悲しかった。若い頃、堀先生に本当によくしかられた。その分悲しさも大きかった。占部名誉教授のご叙勲はともうれしかった。叙勲の推薦書をしたためているうちに、油症の認定のお仕事は大変だったんだと感服した。その自分が油症の班長職を担うなんて夢にも思わなかった。油症の仕事は私の人生観をすっかり変えてしまった。いい風に変えたと思う。アトピー性皮膚炎の治療学の整理や黒色腫の免疫療法は長年の夢だったが、集中力がなくなった自分を医局の皆が支えてくれている。皮膚科医としての私は、今でも医局に育てられている。

古賀 哲也

(昭和56年卒)

昨今、大学独立行政法人化による研究と診療業績の厳しい評価、二年間の卒後研修制度導入による入局希望者の変動など、医局運営も大変な時代のようなようです。振り返ってみれば、私は約四半世紀前の昭和56年に同期の仲間7名と入局し、仕事以外にも飲み会、スポーツ、旅行など共にすることも多く、古き良き時代の医局生活を楽しくのんびりと過ごしていたなあと、感慨深いものがあります。同期の仲間は大半がすでに開業していますが、私はといえば、まだ独り立ちできずに、九州大学病院での勤務を最後に退局し、現在は福岡の赤十字病院にお世話になっております。

入局後から今日まで、同門会の自遠会の先輩、同僚、後輩の先生方に、様々の所で御指導および御協力を承り、医師として勤めてこられました。特に占部教授、堀教授、利谷教授、中山教授、古江教授の二つの大学の5名もの教授の元で直々に御指導頂ける機会にも恵まれ（おそらく私以外にはいないのでは）、多くのことを教わりました。時には、仕事などで失敗や挫折もありましたが（何度となく）、多くの自遠会の先生方に激励を頂きました。病院全体からみれば皮膚科はマイナーな診療科ではありますが、九州大学皮膚科教室というメジャーな母体出身ということで大変心強く感じたこともあります。このようにこれまで私は教室にどっぷりと依存した人生を歩んで参りました。

今日は21世紀の改革ばやりの時代で、なんでも改革のようです。たとえ今後医局制度がどのように改革されても、教室の発展のために、また若くて優秀な教室員の夢をかなえられるように（微力ながらも学外から）応援したいと考えております。

思わぬ患者さんの突然死

山野 龍文

(昭和56年卒)

悪性腫瘍（特にM.M.や悪性リンパ腫）や重症熱傷の患者さんの主治医になった場合は、すぐ真近に来るかもしれない死をいつも考えながら勤務しているし、実際死亡された患者さんのことは今でも憶えている。しかし、手術が無事終わってあと2、3日で退院だという患者さんが突然亡くなられた経験も一生忘れられないものである。

その方は70歳前後の人の良い女性Aさん。外陰パジェット病で昭和59年秋頃入院されたと思う。私はこの方が好きで、毎日2～3回は顔を出して話をしていました。

その日の朝早く、病棟の桂主任看護師から電話が入り、私の頭の中は「真白」になった。「何で一」と受話器の向うに叫んでしまった。

病棟に駆け付けると、もう遺体には白い布がかぶされていた。布をとって、Aさんの顔を見ると不思議にとっても穏やかだったのが印象的であった。

当時の病棟医長であった今山修平先生から剖検の同意を家族から得るように言われた。1人暮らしと聞いていたので、患者さんの自宅（南区か那珂川町）へ行って、もちろん無断で鍵を開けて手がかりを捜した。電話のアドレス帳から関西在住の実兄の電話番号と住所がわかり、その場で電話した。しかし、突然の電話に、しかも20年以上も会っていない没交渉の妹の死亡連絡に向うも戸惑われたことと思う。なかなか同意してもらえなかった。大学病院に戻り、もう一度連絡した。和田秀敏先生や今山先生の説得でようやく同意してもらえたが、今度は、遠いので遺骨は引き取りに行けないと言う。それで、剖検後お弔いを済ませてから私が関西の実兄宅へ届けることになった。

死亡後数日して、病理学教室で剖検があった。私が剖検に立ち会ったのはこの時が初めてで、20年以上過ぎた現在まで2回目の経験はない。当時の病理学教授田中健蔵先生が執刀した。死因は肺

塞栓症であった。確か、昭和46年頃横綱玉の海が虫垂炎の手術後死亡したのも、この肺塞栓症であったと思う。

剖検の翌日、簡単な弔いがあった。実兄も来てくれて、私が遺骨を抱えて行く必要はなくなった。



医局生活を 振り返って

橋爪 民子
(昭和56年卒)

今年も世界的な異常気象のせいか猛暑が続いています。私の医局時代は、どの部屋にもエアコンはなく、教授室さえもその例外ではありませんでした。占部教授はよくこの暑さにたえられたものだと言いつつ感心致します。夜には医局の窓を開けるのですが、Tシャツで汗だくになりながら、蚊と戦っていました。当時は蚊も汗も殆ど気にならず、ひたすら受け持ち患者のチェックや、学会発表、勉強会等の準備に明け暮れていました。今ではもう放送中止になりました「城達也」の「ジェットストリーム」を聞きながら真夜中に車を走らせて帰宅していたことが懐かしく思い出されます。

当時は、治験会も多く、よく東京での研究報告会に出席させて頂きました。学会発表の際の文献検索や、スライドの作成など学会が近づくと製薬会社の方にも大変お世話になりました。入院患者はLymphomaも多かったため、主治医となることもあり、第一内科の勉強会にも一人でよく参加させて頂きました。まだ、HTLV-1が発見されていなかった頃です。当時勉強会でお世話になった第一内科の血液学の先生には今でも、時々自分の患者さんのことでお世話になっています。

佐賀好生館への出向中は、幸田先生に大変お世話になりました。その時の症例は「Glucagonoma syndrome」としてまとめ、J Am Acad Dermatol. (1988 ; 19 : 377-83) に掲載されま

した。その後、米国留学から帰国後は、登録医として長く医局で勉強させて頂き、堀先生や中山先生、和田先生のご配慮に心から感謝しています。今山先生には、学位論文「結合織内の樹枝状細胞と線維芽細胞の走査電顕像」のご指導や、アトピーの勉強会で大変お世話になりました。宮原、棚橋、久保田、上村の各先生とアニマルセンターにも足繁く通い、アレルギーの勉強を一緒にさせて頂いたお陰で、アレルギー学会の専門医を取得することができ、大変感謝しています。Fisherの抄読会には片山先生も加わり、毎回とても活発な意見が出され、皆元気一杯でした。

臨床面では、堀先生の外来が極めて印象的に記憶に残っています。堀先生の鋭く、的確な診断や疾患名の豊富さにはいつも感銘を受けていました。また、入局後現在に至るまで、占部ご夫妻には公私にわたり、とてもよく面倒を見て頂きました。特にアルバイト先の占部医院で、開業のノウハウから性病の診断と治療まで直接ご指導頂いた事が、私の現在の開業の基礎になっていると心から感謝致しております。

最後に、九大皮膚科学講座の100周年記念を心からお祝い致しますと共に、今日の私が医局の多くの先生方にご指導頂き、支えられてきたことに改めて感謝し、古江先生を中心とする、現ご教室が益々発展されますことを祈念申し上げます。

いろいろ楽しませて いただきました

松田 哲男
(昭和58年卒)

○治験会議

樋口教授、占部教授の時代から、九大皮膚科教室は多くの新薬の開発に関わってきたことはよく知られています。クロトリマゾール（エンペシド）から始まった抗真菌外用剤開発ラッシュ当時の、真菌研究室の諸先輩(松本、本房、真崎、宮

岡、古賀、山野)方のご苦勞は大変なものだったと入局当時に聞かされていました。

堀教授が就任され、それまで以上に、まさに怒濤のように臨床治験の依頼が各社から押し寄せてきました。当時は治験の開始時の検討会、中間報告会、終了のキーオープン等とひとつの薬剤に何度かの会議が東京で開催されていました。治験は堀教授を核として、実務の担当は平助手の仕事となることが多く、古賀先生、安元先生、小生、利谷先生を中心に、若い先生を何名か交えて実行してきました。会議に出席しても、九大の外来の業務に支障があってはいけませんから、最終便で帰福するか、早朝便で戻って外来に直行するといった、かなりハードなスケジュールでした。最盛期には年に50回上京、8日連続で往って帰ってと飛行機に乗り続けたこともありました。堀先生とご一緒に便に搭乗すると、改札口のところで待ち合わせをするのですが、スーパーシートの“せっかちな?”教授をお待たせしないため、いつも22Cか22D(後方ドアの近くで足下に荷物が置いて一番にドアを通れるところ)に席を取っていたことを思い出します。

さて、時はまさに平成バブル期、1～2時間の会議にほんやり出席すると、後は豪勢な食事が待っています。一流ホテルでの宿泊も物怖じしなくなりました。教授のお供で銀座の高級クラブに連れて行ってもらい、ホステスのお姐さん方の洗練された接客態度に、中洲とはずいぶん違うものだと感心したこともあります。(お姐さんの住所と電話番号をゲットして、やに下がっていた某先生、“ハルシオンを送って?”と言われてがっかりしたとか……。)

リムジンのハイヤーも使わせてもらって、千葉マリン、神宮、東京ドームに乗り付けて野球観戦ということもありました。ゴチになるだけでなく、自前でもいろんなレストランで食事、ジャズライブのお店には何軒もボトルがキープしてありました。行きたくもないのに遅くまで付き合わされてしまった先生方、ここでお詫びします。週末の会議なら翌日は、神保町の古本屋や、渋谷のCDショップ、西新宿の中古レコード屋を巡り、本当

に楽しい時間を過ごさせて戴きました。いい時代だったんですね!

時は変わって、21世紀、大学では治験の実行はなかなか困難になっているようです。その代わり、治験の主体は開業医に移って来ているようです。開業医で行う治験では、残念ながら東京での会議はあまり行われません。結局、昔いい思いをした分、一生治験からは離れられないのかもしれない。

○日本皮膚科学会支部対抗野球 in 福岡ドーム

平成4年の晩秋、堀教授から廊下で呼び止められて、“松田君、なんか、今度出来る福岡ドームの資料をもってないかい?”と訊かれました。早速、平和台球場最終公式戦(●近鉄バファローズ0-1○福岡ダイエーホークス、勝利投手:若田部、敗戦投手:野茂)で手に入れた福岡ドームのパンフレットを教授室に持参しました。そこで聞かされたあっと驚くひとこと、“再来年の日本皮膚科学会総会るとき、福岡ドームで野球の支部対抗戦を催そうと考えているんだけど、交渉してこいよ。少しはコネもあるんだろう?”……。

そこで、まだ完成前の福岡ドームの事務局に交渉を始めました。ドーム側でも、草野球の申し込みを受けたことはなかったようで、向こうにも戸惑いがあったようですが、その年末には多分OKだろうと教授に報告しました。すると、平成5年の西日本皮膚科誌の2号には、福岡ドームの詳細(屋根の開閉のこと、日本シリーズの開催される10月中旬の気候に合わせてホームベースの位置が決まっていること等)を紹介され、そこで、翌年の皮膚科学会総会の時に、支部対抗戦を福岡ドームで開催すると宣言されていたのです。その記事が掲載された直後に行われた岐阜の皮膚科学会総会では、既に(一部で?)話題騒然で、多くの先生方から励ましのお言葉を頂きました。

何せ、翌年のダイエーホークスの試合のスケジュールが決まらないとはっきりしたことが言えません。結局、平成5年のシーズン終了後、当日は福岡ダイエーの試合が組み込まれることになってしまいました。プロの試合が行われるときは、

早くやって来る選手は試合開始の5時間前にはランニングに現れるようです。そこで、対抗戦は早朝からのスタートになりました。この間も、球場内の照明（明るさによって値段が違う）、スコアボード、場内アナウンス、審判の手配などと準備を進めていきました。

試合は学会の前日、あいにくの雨模様となりましたが、そこはドーム球場のありがたさ、雨天中止はありません。選手は各支部長推薦のオールスターチームです。堀教授は、実は選手として出場されたかったのですが、結果を重視されたのか（?）、始球式のみでの参加でした。第一試合は西部支部 vs. 中部支部、次に東京支部 vs. 東部支部が行われました。実力伯仲、好試合の連続でした。当時のホークスオーナーの中内氏の診察をされていた原田昭太郎先生のお世話もあって、雨が小休止した時に屋根を半分程開けてもらいました。自遠会関係では、利谷先生、師井先生、太田先生が出演し、なかでも利谷先生は、ワンバウンドで左中間フェンスに当たる大ツーベースヒットを放ちました。

決勝戦は、西部支部 vs. 東京支部と下馬評通りの対戦となりました。東京支部は揃いのユニフォーム、西部支部は各大学の様々なユニフォームでの参加となりましたが、岡山大学のSCABIES、熊本大学のBLUE NEVIなんていう皮膚科らしいユニークなチーム名のユニフォームが印象的でした。優勝は西部支部が逆転勝利で手にしました。

試合の結果は、学会会期中に参加者に配布した日刊皮膚科学会総会ニュースにスポーツ新聞の文調で記載した筈ですが、現物が見つかりません。残念！



第10回堀杯

占部 篤道
(昭和59年卒)

平成6年、第10回堀杯が開催された。堀教授はゴルフの調子が良く、その日は優勝を狙っていたと後で聞いた。

入局当初は多少の希望をもってゴルフ大会の前にはよく練習に行ったものだが、10年も過ぎると、そのようなことは心の隅にも浮かばなくなる。その日も最終組で前の組が残っていたニアピンやドラコンの旗を回収しながら淡々とホールをまわり、最終の18番のグリーン上にやってきた。他人のパットを待っている間に、ふとプロゴルファーがパターのグリップを右手で持ち、眼の前でぶら下げてグリーンの傾斜を読むことを思い出した。やってみたところ、思った以上に、自分のいるグリーンが傾斜していることに気付いた。そのおかげで、うまく2パットでホールアウトすることができた。

クラブハウスに戻り、前の組までの結果では1位だった堀教授を抜いて優勝したことを知らされ、びっくりした。生涯初めての優勝である。その後の懇親会での優勝者のスピーチで堀教授にお詫びの言葉を申し上げたところ、堀教授は「いいよ。いいよ」と言ってはおられたが、内心やはり穏やかではなかったのではないかと思う。最終ホールでプロの真似をしなければ、いつも通り3、4パットはしていたはずである。妙な思い付きなどしない方がよかったのかもしれない。



九大皮膚科 開講百周年によせて

竹内 実
(昭和60年卒)

私は昭和60年(1985年)九大皮膚科教室に入局し、平成6年(1994年)に福岡市の郊外に開業するまで教室に在籍しました。その9年間、多くの方々のお世話になりました。入局をお許しいただいた占部教授。入局一年目、仕事のとても遅い(そのくせ無駄口が多い)私を、処置室で仕事をてきぱきとこなしながら、カバーして下さった同期入局の堀内(旧姓樋口)理恵先生。入局二年目に勤務した広島日赤で、私の未熟さにあきれながらも、懇切丁寧に真菌の鏡検から教えてくださった磯田美登里先生。論文の原稿を、何度も校正して下さった今山修平先生。大学院の論文がなかなか完成しないのをご心配頂き、励まして下さった堀教授。その他にも枚挙にいとまがありません。教室在籍中の9年間を思い出すと改めて感謝の気持ちが湧きおこってきます。

九大皮膚科が開講した1906年は日露戦争の翌年です。日露戦争が終わった当時は国民こそって戦勝を祝ったそうですが、今の日本で日露戦争100周年をお祝いする人は殆んどいません。長い戦争の時代を含む100年間の医局の運営の大変な困難を想像するとともに、戦争があっても、社会が変化しても存続してきた教室は医学、医療の普遍性の象徴のようにも感じられます。

介護施設に入所中や、在宅療養中の高齢者、皮膚科を標榜していない病院に入院中の患者さんを往診する際、皮膚科学が未だ医療全体に行き渡っているわけではないことに気付くとともに、開業医(特に私のように医師一人の医院)の力の限界を感じます。近い将来、医療の提供体制はIT技術などを利用しながら、より効果的なシステムに変わっていくのかもしれませんが。

最近の九大皮膚科教室は、研修制度の変更などで医局員はてんてこ舞いの忙しさだと聞きますが、

それにもかかわらず、従来の専門分野に加え、褥瘡、美容皮膚科など次々と新しい分野に取り組みれ、頼もしい限りです。教室の皆様のご健康と今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。

学会のこと

占部 和敬
(昭和60年卒)

堀嘉昭教授の時と古江増隆先生が教授になられたから、いくつかの主催学会を事務局として運営させて頂いた。具体的には平成7年の国際シンポジウム“メラニン産生と悪性黒色腫”、平成8年の古江増隆教授就任記念福岡地方会、平成15年のアトピー性皮膚炎治療研究会第8回シンポジウム、平成16年の第1回日本褥瘡学会九州地方会であるが、その印象に残っていることを書き留めたい。国際シンポジウム“メラニン産生と悪性黒色腫”は平成7年、大阪で日本色素細胞学会が行なわれた2日後の12月5日と6日にアクロス福岡国際会議場で行なわれた。外国から15名の講演者を招待し、また国内から30名近くの研究者を招待し、計32の講演が行なわれた。堀教授より自由に運営してよいと言われ自由にやらせて頂いた。当時はまだeメールも普及していなかったのもっぱらFAXを用いて事務連絡を行なった。渡航の旅費に関する書類が複雑で、一人に10回ものFAXを送らざるを得なかった。講演では今では一般的になっているダーモスコープの所見や、センチネルリンパ節生検など先端の研究成果が紹介された。学会の内容は本となり、堀教授、Vincent Hearing先生(NIH)、中山樹一郎教授の編集でMelanogenesis and Malignant Melanoma: Biochemistry, Cell Biology, Molecular Biology, Pathophysiology, Diagnosis and Treatmentの題名でElsevierより発刊されている。

古江教授の就任記念福岡地方会は、平成8年11月23日にスカラエスパシオで開催された。この日

は福岡市で種々のイベントが行なわれており、ホテルが全く予約できず、招待した先生方、古江教授に多大な迷惑をおかけした。

アトピー性皮膚炎治療研究会第8回シンポジウムは平成15年1月25日にスカラエスパシオで開催された。古江教授の妙案でEBMに基づく個々の治療法の評価を11名の演者に講演して頂いた。中村恭子先生の細かい心遣いに助けられた。

第1回日本褥瘡学会九州地方会は、平成16年5月22日に九州大学医学部百年講堂で開催された。医療従事者の褥瘡への関心の高まりにより、新たに地方会が開催されることに決まり、第1回九州地方会が行なわれた。プログラム作成などで辻田淳先生にご尽力頂いた。初回なので参加人数がわからず、500~600名を予想し準備していたが、実際には900名の参加者があり盛況であったが、プログラムが不足し、また、会場に入れない人が多数あり、学会を手伝ってくれた医局の方々に多大な迷惑をかけた。

学会当日は医局の先生方に大変お世話になった。深謝したい。



尾木 兵衛
(昭和61年卒)

私は九州大学卒業後、1988年に入局させて頂き、「大分県立」「広島日赤病院」各半年の出張を合わせ、4年10ヶ月を勉強させていただきました。

真菌研究室等にお世話になり、外来株の同定や植え継ぎなどを、本房講師や松田医局長から丁稚習いの様に教わり、培養試験管が一本消えている事に気付く前に「*T. raubitschekii*」を同定しておいたから」と、松本講師から告げられる、そんな教室時代でございました。

医局には優れた先生方が内外に多数揃って居られ、病棟医長の姿が1ヶ月見えないと思っていたら、Dermatopathologyのtextbookが出版され

ていたり、駒として余りに背丈不足であったため、残念の気持ちは深く抱き続けております。最後迄、分け隔てず教育して頂いた先輩諸氏へ、深謝の念が跡絶える事はありません。

後、赴任した益田日赤では、幼少期見知った開業医の息子様連から「医者的心得？」を叩き込まれ、また広島県保健所等へ勤める傍ら、多彩な市民生活や行政によって生かされる自らの現実を知り、気付けば自身地域医療へ埋没する日々へ至って居ります。医学科学の変遷は素早く、一步でも半歩でも近付いておきたいと願うばかりの日々でございます。雑誌・会誌等で先生方の御活躍を目に致しましたら、極力手許へ写し田舎開業医の励みとする様、努力をしています。

先生方の一層の御活躍と、教室の着実なる御発展を祈念申し上げ、御祝辞に代えさせていただきます。



久保田由美子
(昭和62年卒)

九大病院時代を遡って、何が一番印象に残っているかいろいろ考えたが、皮膚と同じように広く浅くしか過ごしていないということに今さらながら気づいてしまった。

大変だったなあと思い出したのが、平成4年度の西日本皮膚科の編集長時代である。当時、医局長、病棟医長、外来医長、編集長は医局員の選挙で選出されていたが、編集長だけは助手でなくてもよいということでなぜか医師になって6年目の私が選出されてしまったのである。まだまだ皮膚科の“ひ”の字もマスターしていなかった私が編集長だなんてどーしようと目の前が真っ暗になったことは覚えている。選挙翌日、古賀哲也先生や編集委員をお願いした先生方（入来 敦先生、竹内 実先生）を混じえ、ひいては当時福岡日赤病院の武石正昭先生（元編集長）まで巻き込んで、今後の編集室のあり方について緊急会議を開いた

のを思い出した。本来、編集長とは、論文の採用の有無を決定する人であるはずだが、そういう権限は私にあらうはずもなく、もっぱら、論文の二校（著者の初校済みの論文を再度校正すること）が主な仕事であった。当時の堀教授は私達の校正した二校を隅々までチェックされ、毎回、真っ赤な原稿が戻されてくるため、内容を吟味するよりも誤字、脱字を見つけることが優先であった。あれから10年以上たった今なら、ゆっくり内容をみる余裕もあるのに、あの当時は本当に字面を追いかける毎日だった。特に文献の巻番号、年数までチェックされていたのは驚きだった。しかしこの文献こそが一番大事であることは自分が孫引きするときに実感するのであった。

編集室在籍中、今は亡き工藤美栄さんと2人でリュック背負って、ヨーロッパに10日間程旅行したのもいい思い出である。当時、私と同期の宮越（現、鈴木）友子女史がパリに留学していて、彼女に会うのが目的の一つであったが、ベルギーからパリに列車で到着してから数時間、彼女と連絡がとれなかった時も、ヒトの性格は場所が変わっても変わらないということを学んだ一件であった。充分旅を満喫して日曜の夜帰国し、月曜の朝、当時の病棟医長の永江祥之介先生からの電話で起こされた。生まれて初めての遅刻であった。

こうしていろいろふりかえてみると、今までの人生の中で、九大病院時代は特に個性的な方々との出会いが多かったように思われ、案外楽しい時間を過ごしていたんだと自己満足している次第である。

医局の思い出

黒木 りえ

(昭和63年卒)

私が入局したのは昭和63年4月で、前年の10月に故堀嘉昭教授が赴任されたばかりで、堀教授を中心に医局員全員が張り切っている時期でした。

5月の医局旅行は幹事の師井先生や谷崎先生の下、九重レイクサイドホテル宿泊で、新入医局員として浴衣姿の堀教授と一緒に宴会場のステージに立ち「オニのパンツはいいパンツー」と歌い踊りました。時の医局長の本房昭三先生も一緒にステージに出て下さいました。翌日はゴルフ組と観光組に別れ、観光組は別府の地獄温泉などを観光して回りました。血の池地獄で永江先生が、ふざけて慢性皮膚病全般に効くと銘打ってあるまさに血の色をした血の池軟膏を購入されたのを、なりたてほやほやの皮膚科研修医として妙に印象深く覚えております。あの時の血の池軟膏の効果ははいかがでしょうか？

普段の研修については、病棟回診や木曜カンファレンスで主治医の我々研修医に堀教授が鋭い質問をされ、しどろもどろに答えているうちに次回までの宿題となり勉強し直すこともしばしばでした。当時研修医としての外来での研修は、午前中は外来で新患の問診をとり、処置室で真菌の検鏡や皮膚生検をしたり、臨床写真を撮ったりしながら、カルテを見て「そうか、こういう皮疹ではこんな診断、鑑別診断をつけるのか」と実地臨床研修をするといったものでした。自分では思いもつかないような診断名がついていて、教科書のページをめくるともしばしばでした。午後は皮膚生検のプレパラートを見て勉強したり、臨床写真の整理をしたり、また木曜カンファレンスでの示唆を踏まえて、凍結標本をクリオスタットで切片にして蛍光抗体法や免疫染色法で染めたりしていました。そんな私に堀教授が堀蔵書の朱印が押してある「A Colour Atlas of Dermato-immunohistocytology」の本を下さったことも良い思い出です。今も本棚に置いてあります。

そして2年の臨床研修期間も終わりに近づき、堀教授に大学院進学希望を伝えたところ、「それなら皮膚科の生検材料を使った研究につながる、現在井上光世先生が大学院生として所属しておられる生医研細胞部の谷口俊一郎助教授の教室が良からう」と推薦して下さいました。今考えても恩師、先輩に非常に恵まれていて、大学院の4年間はマウスのメラノーマの転移に関する研究に取

り組みました。実験室でホルマリンに目をしばつかせながらホルマリン固定したマウスの肺に黒く点在するメラノーマ転移巣の数を数えていたことを思い起こすと、今でもマウスとホルマリンのにおいがしてきそうです。

生医研免疫学教室名誉教授野本亀久雄先生が「医者になって最初の6年間に学んだことでその後の方向性が決まる」といったことをおっしゃっていましたが、やはり研修医2年間とそれに続く大学院4年間の基礎が今につながっていることを感じます。



写真の思い出 —新米研修医の頃—

濱田 学
(平成元年卒)

皮膚科の新人研修医が、初期研修において真先に覚えなければならないことの一つが臨床写真の撮り方であることは言うまでもない。私自身も皮膚科に入局後、同期研修医とともに、臨床写真として最適な構図、倍率、露出、シャッタースピードなどについて外来医長から指導を受けた。現像が医局に届いた後は、臨床写真の整理が1年目研修医の仕事であったが、これは外来で見た疾患を復習する絶好の機会でもあった。特殊な場合以外は、撮影条件を一定にするように取り決めていたにも関わらず、摩訶不思議、研修初期は珍写真が続出した。派手な衣服を着たまの患者さん、病変部が何処にあるのか分からない、患部の拡大が小さ過ぎる、写真の隅に何やら怪しげな物体(カメラのコードや撮影者の指)が写りこむ、闇夜の心霊写真(露出不足)等々。外来写真室には数台のカメラが常備されており、用途によって使い分けたが、これがまた実に頻々と故障、不具合を生じた。現在のようなデジタルカメラ時代では、撮影したその場で写真を確認し、不適当な分はその場で消去すればよい訳であるが、写真が出来上がってくるまで分からない当時あっては、数日

間、立て続けに貴重な臨床写真がお陀仏になることもあった。写真整理の度に、卓上に並んだ写真を前に研修医同士互いに顔を見合わせて絶句し、こっそり不良スライドを廃棄した。

投稿用の組織写真は、中央研究棟の写真室で撮って貰った。骨董品級の単眼顕微鏡を覗き込み、組織標本の撮影箇所を指定すると、写真室の主のような職人肌の小父さんが、壁に映し出された組織の映像を見ながら、ビリヤードのスティックのような棒で、まずフォーカスを微調整。然る後、A4サイズのフィルムをセットし、手に持った厚い檜の板でスナップを利かせてランプからの光線を遮り、勘をもとに露出を調整した。古色蒼然とした方法ではあったが、写真の仕上がりは見事の一言に尽き、いつも様々な科からの撮影順番待ちの予約で一杯であった。

当時のスライドフィルムを見返すと、多忙な中にも充実していた研修医の日々が懐かしく思い出される。開業した現在も努めて記録写真を残すようにはしているが、気が急いでいるためか、研修医の頃にも及ばないこともしばしばであるのが残念である。



皮膚科学教室開講 100周年によせて

古村 南夫
(平成元年卒)

九州大学皮膚科学教室の皆様、このたびは記念すべき開講100周年を迎えられ、心よりお喜び申し上げます。

平成元年に入局し約5年間お世話になりました。短期間でしたが、歴代の教授の印象に残った言葉を記したいと思います。

平成13年に医局長として、皆見省吾先生の第100回皮総会における業績展示や、旧看護婦宿舎に保管されている大正時代からのカルテ整理と、古江教授のご意向で蠟細工標本ムラージュを学内

展示するための搬出を行って、教室の歴史にじかにふれることができました。

ムラージュ (moulage: もとは「型による成形」という意味のフランス語) の技術は明治30年代にフランスからもたらされたそうで、皮疹から石膏の型を取り、これにパラフィンと蠟の混合物を流し込み固めて彩色します。

黒塗りの古びた木箱からムラージュを取り出し、降り積もった埃を払うと、当時の再現技術の生々しさに驚き、1世紀にわたる九大皮膚科の歴史を感じたものです。

現代版ムラージュを作ろうと、本年5月に島根大学に着任して早々、島根県産業技術センター、島根大学産学連携センターの協力を得て、産学共同で三次元バーチャルリアリティと裸眼立体視ディスプレイという最新技術を用いた皮膚疾患デジタルアーカイブ作りを始めています。当時の名匠のムラージュ制作の技と九大皮膚科の先輩方の観察眼にどこまで迫れるか試してみたいのですが、その過程で色の再現というのは非常に難しいことがわかりました。

堀嘉昭先生はエッセイ集「皮膚科医の春秋一時のまにまに」の中で、「皮膚科医はまず色を正確にみて客観的に表現することがなにより大切」と述べられました。見えている色と見ている色の違いが皮膚科医の臨床力の差となって現れるのは、デジタル画像技術全盛の現在でも変わらない様です。

樋口謙太郎先生は産学共同について、「産学共同結構、象牙の塔の学園は遠い昔のことで社会と密着したものであるべき」と随想集「どんたーく」に記されています。基礎研究に没頭した時期のあった私には今更ながら、地方大学での臨床力の大切さと社会に密着した研究の重要性が感じられ、九大皮膚科時代に先輩の先生からもっと学んでおけばよかったと思っております。

また、「どんたーく」の中で「カネミ油症について」には、第一例が塩素痤瘡(いわゆるペルナ病)の症状で、奇しくも九大に米軍の軍用機が墜落したお陰で各学部間の連携が深まり、学園紛争の時代であったにもかかわらず、意外に原因物質

の究明は早かったエピソードが綴られています。その後も、占部教授のご尽力や古江教授のダイオキシン検出のご研究など、連綿として引き継がれているのは周知のとおりです。

これからの皮膚科学教室の益々のご発展をお祈りしております。

中村 恭子

(平成2年卒)

私が入局した平成2年は、故堀嘉昭先生が主任教授でおられました。他大学卒業の私は病院のこと、それこそトイレや食堂の位置さえもわからず、新しいことばかりで、毎日、無我夢中であったと記憶しています。

病棟に上がって初めて手術患者さんを受け持った時のことです。この方は、ペースメーカーを装着しておられました。こんな時、今だったら事前に麻酔科にコンサルトすると思いますが、何しろ初めてのことで手術前日に麻酔科の術前診察となりました。午後遅く診察に来た先生が何か言いたげに私を見た後、帰って行ったので、問題があったのかと思っているとやはり、麻酔科カンファレンス室に来るようにとの電話が。1人で大丈夫かとの声を後に、緊張しながらカルテとフィルムを握り締め行ってみると、そこにはオーベンの先生が待っておられ、採血などのデータは問題ないが、手術中にペースメーカーが止まるかもしれない危険なので、機械業者が別室に待期していなければ明日の手術は難しいと言われるのです。10年はもつはずのペースメーカーを1年前に入れており、かつ時間はすでに午後7時くらいであったので、私はいかに手術がこの患者さんに必要かを力説して手術の許可をもらおうとしましたが返事は同じ。次第に責任がどうのという話になり、世間知らずで向こう見ずだった私は「患者さんは麻酔科の先生の顔なんて知りません。皮膚科の患者さんです。最後はうちの堀が責任をとります!？」と、啖呵を切って退出していました。病棟に戻って事情を

知った時の副病棟医長の田代研児先生が真っ青になり、慌てて麻酔科に出向いてとりなしてくださったため無事手術は出来ました。手術の時、隣室にペースメーカー業者さんが待機していたのは言うまでもありません。しかしその後、麻酔科に1人で出かけてはならんというお達しこそありましたが、どなたも私を責めませんでした。故堀教授は「君がすることなんてすべて自分が責任をとれる範囲内だから、正しいと思ったら好きにしている」とさえ言ってくださいました。

今は世間の医療者への視線も厳しくなり、すぐ責任が問われる訴訟の時代です。あの時代は社会もゆったりとしていて許されることが多かったのかもしれない。それでも暖かく長い目で若造を見守ってくださった懐の深い、器の大きい先生方がおられたからこそ、今、自分がいっばしの皮膚科医として仕事が出来ると大変感謝しています。これからも時代に沿った、それでいてゆとりのある豊かな医局であり続けて欲しいと願っています。100周年おめでとうございます。



初舞台

板倉 仁枝
(旧姓鳥巢)
(平成5年卒)

皮膚科学教室100周年おめでとうございます。この伝統ある輝かしい歴史の1ページに名前を載せることが出来て光栄です。

私が皮膚科に入局したのは1993年のことでした。入局して様々な“初舞台”がありましたが、中でも思い出すのは初の海外学会発表です。

研修医2年目の時、私は熱傷の創傷治癒の動物実験をすることになりました。アニマルセンターに入るのも初めてならラットを飼うのも初めてです。ラットの毛を剃って麻酔をして熱傷を背中に作ります。まず、その熱傷を作るお湯を医局のやかんで作ってアニマルセンターに持ち込もうとしたら、秘書の堀田さんに思いっきり叱られました。

それからずいぶん後に、罪滅ぼしと言うわけではないですが、医局に湯沸しポットを寄贈した時は、逆に、このくらい人に感謝されたことがあるだろうかと言うくらい医局の女性陣に感謝されました。

実験も済み、データも出揃い、何とか形になりそうだねと、共同研究者と話していたところ、当時この実験で指導をいただいていた永江先生に、「これをイタリアの学会に出そう」と言われました。まだ国際学会がどういうものか、また、ポスターと口演と言う二つの発表形式があると言うことすらもよく知らなかった私は、恐れも知らずに口演をすることになりました。原稿を書いてみれば永江先生にこれはまるで夏目漱石の文章だねと言われ、英語での発表の時はまず「注意深く聞いてくださいね」の一言を添えるといい、と松田先生にコツを教えてもらい、医局で予行練習をした時は今山先生から英語で質問されて思わず「thank you」としか言えず諸先生方に笑われ、どうなることかと思いつつ、ともかく話す内容を丸暗記しました。そして、いざイタリアです。演台に立つと座長は永江先生であり、ひと安心とばかりに話し始めると会場の電気が消えています。これではスライドが見えないので、あわてて「会場の電気を消してください」とお願いしたところ、会場が薄暗くなりました。ちゃんと通じている、俄仕込みで医学英会話の勉強をした成果があったのかなと思いつつ、一気に覚えていた内容をしゃべりました。スライドの第一枚目はイタリアの国旗をバックにタイトルと名前を載せた派手なもので、これには会場からどっと笑い拍手がありました。今ではとてもそんな思い切ったスライドは作れませんが、外国人にはとても印象深かったらしく、学会の間中、ディナーの時も、ツアーに参加して南イタリアに行った時も、「ああ、国旗の発表のドクターでしょう？」と発表内容とは関係ないところを覚えてもらいました。

現在ロスアンゼルスに留学し、学会発表をする機会も増えましたが、未だにあの時ほど会場から笑い拍手をもらったことはありません。本当にいい経験をさせてもらったと感謝しております。これからも綿々と続く皮膚科の歴史に、せめて自

分の足跡を少しでも残すことができればと思いつながら、診療、研究に励みたいと思っております。これからご指導御鞭撻のほどよろしくお願いたします。

百周年に寄せて

国場 尚志

(平成5年卒)

平成5年に皮膚科に入局した私の同期は男性3名、女性4名でした。優秀で華やかで活発であった女性陣に対し、男性陣はやや気押されていた事実は否めません。研修医1年目の時、故堀嘉昭教授を会頭に九州大学が主催する日本皮膚科学会総会が催されました。同期の女性の先生方は、学会やその後の宴会、福岡ドームでの四地区対抗戦を通じて、来賓の先生方に強烈な印象を与えたようでした。後日、来賓であった先生方が再度来福の折に、女性の先生方に再会するのを楽しみにしていた、という語り草を当時の医局長の松田哲男先生からうかがいました。我々男性陣のお覚えは皆無であったに違いありません。

思えば、私の入局した頃から皮膚科の医局に変化の兆しがありました。

平成18(2006)年1月現在、教授以下の大学勤務が14名(男性12名、女性2名)、医局に属して関連病院に出張ないし休職している医師が37名、留学中3名、大学院生8名(うち7名が医師)で、医局に在籍している医師の合計は61名です。うち男性が29名、女性32名。男性が数で優位であったのは平成15年3月までで(医局員医師64名中男性33名)、以降女性の方が多く、来年度はさらにその傾向が加速する見込みです。

2005年の政府の発表によると、2004年合計特殊出生率は1.29、2005年は日本の人口がはじめて減少に転じたとのことでした。経済成長に伴う女性の社会進出が社会背景にあると言われます。その点では、社会背景が医局にそのまま投影されてい

るようでもあります。職場に女性が増えるにあたって、医局という小さな組織単位ではとても解決できそうもない問題を孕んでいる様にも思えます。逆に、新しい女性優位世代が、医局員誰にとっても居心地の良い組織を作れば、社会に先んじたモデルケースにもなると期待もしていますので、後輩の先生方には是非頑張って欲しいと思っています。

さて、私こと、九州大学皮膚科が百周年を迎えるにあたり、図らずも医局長の任を拝し、百周年記念祝賀会ならびに地方会、百周年記念誌の発刊等につき微力ながらお手伝いをさせていただきました。多数の先生方のご理解とご協力を賜り、無事に事業を終えることが出来ました。この場を借りてご協力賜りました皆様に改めて深く感謝申し上げます。

末尾ながら、皆様のご多幸と今後の皮膚科の発展を心からお祈り申し上げます。



吉田 雄一

(平成6年卒)

自分は平成6年に九大皮膚科に入局したが、その年の入局者は計9名(うち九大出身者は7名)であったと記憶している。当時の同期入局者はすでに独立して開業や関連病院への異動などで、現在九大に勤務している者はいないが、多分講座開設100年のうちで最も入局者の多かった年ではないかと思われる。他のものがなぜ皮膚科を志したのかは定かではないが、自分が皮膚科を選んだ理由は(極めて浅はかな理由ではあるが)勧誘会の際にご馳走になった、初めて食べたふぐが決め手であった。なんとか無事国家試験に合格し入局したその年は、九大皮膚科主催でホテルニューオータニにて第93回日本皮膚科学会総会(故堀嘉昭教授が会頭)があり、初めて任された仕事は、福岡ドームで開催された草野球の応援や重鎮の先生方

の接待などで、医業とは関連のないことばかりであったが、先輩の諸先生方と接する機会も多く貴重な体験をさせていただいた。

同期の人数が多かったため、まとまりを欠くこともあったが、写真整理などの雑用？や処置室での仕事（採血、注射、生検など）は人数が多い分業であった。5時過ぎには仕事を切り上げ（医局を抜け出し）、皆で飲みに行くこともたびたびで、今となっては楽しいことばかりが思い出される。

現在、医療を取り巻く環境も変化し、年々いろいろな面で厳しい状況となっている。医師になり、10年以上たったが、九大で過ごした最初の1年間は自分にとってかけがえのない宝物である。

入局当時のこと

上ノ土 武
(平成7年卒)

平成7年に大学を卒業して2年間麻酔科でお世話になり、平成9年6月に皮膚科に入局しました。麻酔科の時に染み付いた習性で、入局後も毎朝5時くらいに起床していました。

うちにいても特にすることもないので、ただぶらぶらするだけだったのですが、早い時間に医局に来ていました。暇そうなのが目に付いたのか、今山先生にはよく声をかけてもらいました。

麻酔科の時は、ただひたすら麻酔をかける毎日、症例報告を書いたりすることについて意識したことなど全くありませんでした。ひょんなことから今山先生に「この症例について書いてみたらどうだろうか？」と、声をかけていただき書きはじめました。書きはじめるにあたって、「他の報告例で、参考になりそうな文章、良い表現の文章はノートに書きとどめること」など、いろいろな指導をいただきました。症例報告を書き終えた時点で、書きとどめた文章はノート一冊分にもなったでしょうか。その中から自分の意図する内容に類似した文章を選びながら（パクリながら）作成

は進んでいきました。

結構自信を持って今山先生に見せたのですが、見せた原稿は無残なほどに真っ赤になって返ってきました。書き直して提出すると、また真っ赤になって返ってくる、ということが何回もありました。振り返って考えると、それは思い上がり以外の何者でもないのですが、当時は「一度に全部直してくれるといいのに」なんてことを思ったりもしました。しかし、紆余曲折を経ながらようやく完成しました。完成した時にほめてもらったことは今でも忘れられません。

いつのまにか入局して8年ほどの歳月が流れ、取るに足らないことからインパクトの強かったことなど、色々な経験をしましたが、その中でも一番鮮明に、記憶に残っている経験です。しかしながら、その当時の自分と現在の自分を比較しても、はたして何か進歩があったのか甚だ不明です。

皮膚科開局100周年に寄せて

森田 圭祐
(平成7年卒)

開講100周年おめでとうございます。

皮膚科教室が創立されて100年もたつのですね。そして、僕も入局して10年も経ってしまったのか…。 “0” 一つしか違わないけど大きく違うこの2つの数字を思い重ねつつ、個人的な思い出を書かせていただきます。

平成6年、地方の国立大学に通っていた僕は大学の夏休みを利用して、九大皮膚科のカンファレンスを見学させていただきました。その夜の医局の宴会によんでいただき、九大の先生方とお話させていただいていると、向うで当時の皮膚科教授をされていた堀先生がご機嫌に酔われておられました。緊張しつつ堀先生の前に行き、御挨拶しました。「入局させてください」というと、「ああ、入れてやる、わはは」との御返事をいただいて、僕の入局が許可されました（このとき、教授は若

い女性にかこまれてご機嫌だったので、そのおかげも大きかったのでしょうか?。これで、本当に入局して現在に至っていますから、当時はおおらかなものでした。

さて、僕の同期は男性3人、女性2人の計5人で、とても個性的でした。一人ずつ紹介します。

「力久先生」 入局当時としては珍しい携帯電話をいち早く持っていて、「家に固定電話引くより、携帯電話一本にしていたほうが便利なんだよ」といっていました。僕はよくわからないながらも、カッコイイなと思いました。(僕が携帯電話を持つまでそれから4年も必要でした。世間一般に携帯電話が広がったのも僕と同じぐらいでした。) 車もポルシェ(自分の稼ぎで!)をいち早く持っていました。検査の指示は出ているが、伝票が出ていないなどの僕の失敗を蔭でフォローしてくれていたのを後年知って、今でも感謝しています。頭がよく、個性の強いスゴい人でした。口は悪いが、やさしい人です。今、室見で開業中。

「田中先生」 初めて会ったときから個性的な原色の服装は度肝を抜かれていました(ベルトが無くてもはけると、ゴムつきのまっ黄色のズボンをいつも自慢しながらはいていました)。かばん代わりにスーパーマルキョウの袋をさげていました。その後アメリカにわたりケンハシモトの元で皮膚病理の修行をしたあと帰国。帰国後は九大の病理で働いていました。帰国後も何度か一緒に食事をしましたが、入局当時細身だったのが信じられないほど大きくなっていました。おかげでお気に入りの黄色いズボンははけなくなっていました。でも、バッグは相変わらずスーパーの袋でした。向学心のある頭のいい人です。埼玉の実家に戻られました。

「木田先生」 僕の結婚式で、受付や同期生の挨拶を頼んで快く引き受けてもらいました。一番お世話になりました。犬丸で食事をしているときに「私、犬丸のおばちゃんに似てるってよく言われるよ」という自虐ネタを木田先生にふられ、「うん、よく似てるね」と素で返してしまったのは今でも後悔の種です。ゴメンね木田ちゃん、でもやっぱり似てる。本当に頭がよくてやさしい人で

す。今自治医大で御活躍中。

「前田先生」 よくモテました。少なくとも、彼女を好きだった皮膚科の先生を3人知ってます。今は内科の先生と御結婚されてとっても幸せそうです。

またいつか5人集まるといいな。



教室についての随想

浦田 保志
(平成8年卒)

平成9年度に入局させて頂きました。

振り返ってみますと、数多くの先生方から指導されており、それが現在の自分の診療につながっております。諸先生方には大変感謝しております。平成14年の春からは、縁あって、別府市のにしむら皮膚科医院別府診療所で勤務させていただいております。

今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

皮膚科、これからの百年

大日 輝記
(平成8年卒)

私たちは、これからの百年で、何を子孫に残し得るか。歴史を振り返ると、先人の築き上げた百年の重みと、日々享受する恩恵の深さに驚嘆する。祝賀の杯を片手に、皮膚科学に寄せる夢を書き綴った。

1. アトピーワクチン

最もやりたいことのひとつである。今日の免疫学の進歩の中においてさえ、未だワクチンを超える発明はない。アトピーを注射一本で治す。カンバンとして不足はない。

2. メラノーマの制圧

発癌を止めることは困難だが、腫瘍死を防ぐ戦略は立て得る。超早期診断、転移を阻止する方法などが案外早く登場するのではないか。医学全体に発信しうる課題である。

3. 円形脱毛症の治療

マラリアの免疫制御さえ緒についたばかりであり、百年では自己免疫病の解決は難しいだろう。しかしこの先百年も液体窒素でコロコロやっていたのでは皮膚科学の恥だ。自己免疫の牙城に攻め入るのに格好の対象であり、皮膚科で解決したいテーマである。

4. やけどは三日で治す

「好機は過ぎ去り易く、経験は過ち多く、決断は困難である」。臨床に身を置く今、この言葉が一層身にしみる。「今の治療はこれですよ」と口にした瞬間、思考停止に陥り、経験の奴隷と化す。常識を打ち破るのは現場でありたい。やけどを三日で治すヒントが、皮膚科の現場から生まれて欲しいと願う。

5. 皮膚科的遺伝子治療

入浴による先天性水疱症の遺伝子治療（提唱者の名を取って「玉の湯」と称する）の研究が進行中と聞き、そのユニークさと皮膚科らしさに感動を覚えた。経皮的遺伝子治療は22世紀までにかなり浸透するのではないか。議論も多いが、歴史と現場とを踏まえた判断を問われるだろう。

6. 飲む日焼け止め

カバは汗で紫外線を防ぐらしいが、カバ並みでも売れるはずだ。それを売って科を運営できるのではないかとさえ思っている。

7. 若返りのクスリ

皮膚に限っては今更の感は否めないが、人類の永遠のテーマのひとつが手の届くところまで来ている。この領域に立ち入るのはとまどいを感じるが、百年でどこまで進歩するかにはやはり興味がある。

8. 形態への挑戦

私がこの世界に足を踏み入れたとき、「皮膚科は形態学なんだな」と感じた。ひと目で診断するというのは格好良いが、例えるなら心臓病を心音だけで診断するようなものだろうか。心電図には

ノーベル賞が与えられた。病態を細胞の構築と位置情報のみで説明できるなら、それを物と時間軸でとらえる切り口があるはずだ。この茫漠とした感覚を、何とか形にできたら、と個人的には思っている。

医局の思い出

竹内 聡

(平成8年卒)

平成8年の春、堀嘉昭前教授が主催しておられた九大皮膚科教室に入局しました。実は国試近くまで病理学教室に行くかで迷っていましたが、最終的に皮膚科に決めました。内科的治療から外科的治療まで通して一つの病気を扱う診療科であるのが魅力的に思えました。また、ベッドサイドを回った頃、当時の医局長であった松田哲男先生に随分とお世話になったのも大きな要因の一つだったようにも思います。各種飲み会に止まらず何故か医局旅行や忘年会にすら呼ばれ、同期の高原共々図々しく顔を出しており、そのような折に垣間見る医局の先生方の雰囲気も楽しげでした。医者として、皮膚科医として何もわからないままにスタートした医者人生の始まりでしたが、経験豊かな先輩方に優しくご指導頂きなんとかこれまでやって来られました。思い返すと堀嘉昭先生以下、中山樹一郎先生、今山修平先生、永江祥之介先生、松田哲男先生、安元慎一郎先生、とそうそうたるメンバーに囲まれ、日常の臨床業務に加え、毎週の病理組織勉強会、手術の指導、学会の準備など大変お世話になりました。

入局以来10年目を迎えますが、実は大学にいたのは最初の3年間だけでした。皮膚科3年目の或る日、私は意を決して教授室に向かいました。「実は来年から大学院に行きたいのですが。」まだ基礎の雰囲気にちょっぴり未練があったのかも知れません。こう切り出した私に「いや、実はもっと面白い話があるんだよ。」当時赴任されて間も

ない古江増隆教授はそうおっしゃいました。一晚考え、詳細もよく分からないまま無謀にも承諾の返事をしました。思えばそれが長い放浪生活のきっかけになるうとは当時は知る由もありませんでした。その後、様々な偶然、予想外の出来事、人の縁、幸運が重なり、気付けば茨城県のつくば市で製薬会社の（名ばかりの）研究顧問職、米ノースカロライナ州デューク大学で医科遺伝学、そして首都ワシントン郊外にある米国立衛生研究所で免疫学、かゆみ・搔爬行動、樹状細胞の発生・分化学など皮膚科につながる基礎研究をさせて頂きました。無駄とも思える遠回りのようですが、人生の午前中ともいうべき多感な時期に様々な異社会、異文化に身を置き、沢山の素晴らしい友人達に恵まれたのは大変貴重な経験でした。実に六年の長きに渡り医局を離れ放浪していた私を暖かく見守って下さった古江教授には大変感謝をしています。帰国後、今年の4月から再び大学に籍を置き、皮膚科の勉強をさせて頂いています。初めて見る若い先生方、真新しい病院、記憶と少しずつ違っている福岡の街並み…浦島太郎気分を味わいながら遅れた自分を取り戻すかのように勉強する毎日です。これから一体どうなるのかわかりませんが、人と違う経験を活かし、共有し、少しでも皮膚科学の発展に貢献できればと考えています。



汐井球場と 医局対抗野球

板倉 英潤
(平成8年卒)

国道3号線と都市高速に挟まれた、箱崎埠頭の埋立地に汐井球場はある。汐井という名は、博多祇園山笠のお汐井取りが行われる箱崎浜に隣接することから名づけられているが、筥崎宮の参道を真っ直ぐに進んだところにある当の浜は、現在ではこれらの埋立地にすっかり囲まれてしまい、小

さな砂浜をわずかに残すのみである。

球場の正式名称は汐井公園野球場。両翼91m、センター113m、2800人収容の観客席とナイター用の照明設備を有し、全国高等学校野球選手権福岡地方大会にも使用される歴とした野球場である。そしてまた汐井球場は医学部グラウンドなどとともに、医局対抗野球の開催地。入局したばかりの私の初めての医局対抗野球はその汐井球場であった。相手は皮膚科同様、弱小医局の耳鼻咽喉科。私は医学部準硬式野球部出身ということで、野球好きの堀嘉昭教授の過剰なまでの期待を受け、1番キャッチャーで先発出場。先発投手は、これまた中日ドラゴンズの守護神、宣銅烈（ソン・ドンヨル）ばりの球を投げるとの触込みの李昇源先生。

しかしながら、キャッチャーミットに球を受けてみると、まるで打って下さいとばかりの、期待はずれの棒球ばかり。案の定、打線に捉まってしまい滅多打ちの様相。2イニングを投げたところで、とうとう堀先生からピッチャー交代の指令。急遽、私がマウンドを引き継ぐも、今までピッチャーの経験が全くなかったため、なかなかストライクが入らず焦りがつのる。それでも騙し騙し投げながら、回も進み2アウト、打者が簡単なピッチャーポップフライを打ち上げる。しめた。「オーライ」と確かに声をあげて捕球体制に入った瞬間、激しい衝撃を受けたかと思うと、宙に舞いそして地面に叩きつけられる私がいた。かろうじて目に入ったのは、フライを捕って得意満面の4番サードの利谷昭人先生。まるで熊にでも吹き飛ばされたかのような衝撃で、眼鏡レンズが破損し顔面に切創、さらに眼鏡の蔓までも折れており、野球続行は不可能ということを堀先生に報告し、無念の退場となった。

試合は、3点リードを許したまま最終回に突入、最後の打者も空振り三振でゲームセット。私にとっての初めての医局対抗野球、そして堀先生にとっての最後の医局対抗野球は、例年通り初戦敗退で終わった。

入局当時

内 博史
(平成9年卒)

入局した次の日に、当時講師をされていた今山修平先生に呼び止められ、ポロノイ多角形を知っているか、と聞かれた。何のことかさっぱり分からず、間抜けな顔をしていると、ポロノイ多角形という空間分割モデルを使って、ランゲルハンス細胞が表皮のある空間に、均一に分布していることを示すことができる、というような話をされた。どうだ面白いと思うだろう、と言われた訳だが、やはりよく分からず、けむに巻かれたままヒトの皮膚から表皮を剝離し、抗CD1a抗体と蛍光色素でランゲルハンス細胞を免疫染色する手技を教わった。染色された表皮を蛍光顕微鏡で覗いたときの衝撃は未だ忘れられない。これによって、樹状細胞への興味が刷り込まれた。

程なく古江教授が就任された。古江先生が免疫学、殊に樹状細胞に造詣が深いことは、私には幸いだったと思う。私がランゲルハンス細胞に興味を持っていることをお話しすると、古江先生はまずマウスの耳介から表皮を採取する手技と、ランゲルハンス細胞の機能の解析法をいくつか教えて下さった。いわばオペラント条件付けされたような格好で、すっかりその気になり現在に至る。樹状細胞さえ制御できれば、自然免疫、獲得免疫の制御につながり、感染症からアレルギー自己免疫疾患、癌に至るまで治療できるのではないかとまで思っていたが、最近は少し冷静になり、他のエフェクター細胞との相互作用を考えないと、生体の免疫反応は理解できないと思うようになっていく。



開講100周年記念 によせて

西江 温子
(平成9年卒)

100周年、おめでとうございます。

当教室に入局させていただいたのは8年前、松田哲男先生が医局長をしていらっしゃる時でした。

医学生時代は、どの科に進みたいかの意志をまだ明確には持っておきませんでした。ベッドサイドで実際の臨床に触れ、皮膚科の病変は医者も患者も自分で見ることが出来る、という事を改めて認識した時、自分で見て、触って、それらの微妙な違いから病名や病状を判断していく皮膚科というものに非常な魅力を感じました。魅力を感じるとともに、皮膚科に対する興味も一気に深まっていきましたが、ベッドサイドをまわっていると、医学の内容のみならず医局の雰囲気も、実際に感じられる分かなり気になるものです。しかし、ベッドサイドで接した諸先生方はどの先生も感じよく、九大皮膚科医局全体の雰囲気のよさはピカイチで、迷うことなく入局希望を決めたのでした。

入局してまもなく、古江教授が就任されました。私は二人の子供を持ち、今現在は夫の留学に同行して日本を離れています。その度に深いご配慮をいただき、皮膚科医として、そして家庭を持つ一個人として、両方の立場で歩んでいくことが出来ました。

今は育児を中心に、家庭のみに入っておりますが、九大病院での研修医の頃、産休明けに野田啓史先生のご指導のもと国立療養所南福岡病院（現在、国立病院機構・福岡病院）に勤めた頃、設備や器具・薬剤を揃えるところから始め、何もかもが初の経験として臨んだ東比恵皮膚科クリニックの頃、と、ご指導いただいた先生方、共に働いた仲間達とともに、すべて貴重な経験として思い出されます。

病院を離れている現在でも、「何か赤い出来物ができたのですが…」とか「これって何でしょ

う？」など、知人か否かに関わらず尋ねられることが多く、やはり目に見える病変・触れる病変が専門の皮膚科ならではのだなあと、その魅力を再認識しております。

皮膚科学、九大皮膚科教室ともに、今後も発展し続けることと思いますが、私も少しでもその発展に貢献できればと願っております。



医局の思い出

中原 剛士
(平成11年卒)

平成11年度入局の中原剛士です。皮膚科医として働き出して7年目になります。

私が研修医として入局した年は、入局者は萱島美樹先生と私の二人であり、ほぼ毎日が採血係、毎週末が付け替え当番、しかも病棟業務は疲れるにつれ仕事の効率が落ちて無駄話ばかりが弾み、毎日深夜に帰宅、という日々でした。いくらでも寝ることができる私としては、睡眠時間が短いのが多少辛かったのですが、頼りない研修医にもかかわらず、多くの諸先輩先生方に支えられ、とても楽しい毎日でした。2年目の後半は、利谷昭人先生、江口哲先生の下、浜の町病院で半年間働かせていただき、皮膚科のことは勿論、ほぼ毎日3人一緒に昼食をとりながら、社会とは何かについて多くのことを教えていただきました。そして3年目には今山修平先生の下、九州医療センターで1年間働かせていただきました。今山先生の医療にかける熱意、エネルギーは非常にすごく、今山先生と医療センターで新しいことを色々と一緒に始めることができたのは、非常に貴重な経験でした。そして、3年の臨床を経て、4年目からは再び大学に戻り、古江増隆教授、師井洋一先生、内博史先生の下、臨床大学院でヒト樹状細胞の研究と、悪性黒色腫に対する樹状細胞療法に携わりました。初めて実験、研究に関わり、臨床においても少しは以前よりも色々な考え方ができるように

なったような気がしています。

そして、平成17年10月から、古江教授、師井先生の御厚意により、Memorial Sloan-Kettering Cancer Centerに留学する機会をいただきました。悪性黒色腫と腫瘍免疫が研究テーマになるとは思いますが、何とかこの機会を意味あるもののできるよう、がんばってくるつもりです。

まだまだ未熟な私ですが、今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

医局について

内 小保理
(平成12年卒)

私は医局にとっても感謝している。なぜならば、かけがえのないものを少なくとも3つ与えてくれたからである。

まずは仕事。他大学出身にもかかわらずわけへだてなく仕事を与えてくれた。就職難の時代にはとてもありがたいことであった。

次に友人を含めた人間関係。大学在学中に実家は福岡に転居していたものの私自身は福岡に居住したことはなく、入局後周囲には友人どころか知り合いすらなかった。しかしたくさんの同期に恵まれた。時間の余裕もなく様々しながらみも出てくる社会人になると、学生時代のような気のおけない友人は得難いものだと思う。しかし医局はよき友人となれる同期を与えてくれた。また上の先生方をはじめ周囲の人々にも恵まれている。私は入局後3年間に大分や東京など遠隔地で勤務することにより、他科医局や他県皮膚科医局のドクターと話をする機会が多かった。彼らの医局についての話題のほとんどが、医局関係についての愚痴であったように思う。いろいろと聞いていると、しみじみと九大皮膚科はなごやかで円満な医局であると思う。他医局のように対立や足のひっぱりあいなどなく雰囲気が良い。

そして医局はわたしに新しい家族さえ与えてく

れた。夫である。

現在はさらに家族が増え、夫の留学に伴い海外で子育て三昧の日々であるが、これほど公私ともに恩恵をうけた医局には感謝しつくせないのである。

皮膚科に入局して

友枝 裕人

(平成14年卒)

皮膚科学教室開局100周年おめでとうございます。

私は平成14年度入局させていただきました。同期は7人と多く、個性的な面々が集まっていまし

た。7人のうち4人が独身男で、飲みに行くとき女性の話で盛り上がると思いきや、ラーメンの話・音楽の話や車の話で盛り上がり、女性の話だけがみんなの食いつきが悪く、私だけ空回りしていました。入局して4年、同期の男4人は誰一人として身を固めておらず、そのうち3人（私を含めて）は彼女もいない有様です。『みんな、プライベートがんばろうよ』が今の飲み会の話題です。いつまでもこうやって同期で飲むことができたらいなあと思っています。

仕事の方はと言いますと1年目は大学病院で研修させていただき、2年目より九州中央病院にて2年間勤務させていただきました。入局4年目となった本年度より大学病院に戻り、病棟医として皮膚科診療に携わっております。まだまだ学ぶべきことが多く、今後とも御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。